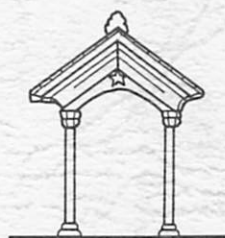


市立函館博物館

研究紀要

第 3 号

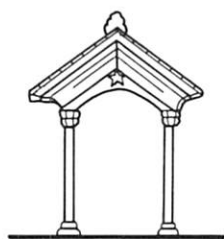


1993

市立函館博物館

研究紀要

第 3 号



1 9 9 3

序

このたび当館では、研究紀要第3号を刊行する運びとなりました。

今回は、歴史の分野から明治期に函館を拠点として北洋漁業を営んでいた、デンビー商会にかかわる「描かれたデンビー一族」と、今、館活動として重点的にその体制を整えつつある自然科学の分野より、高川コレクションを中心とした「館蔵・貝類標本について」を収録しております。

この自然科学の分野につきましては、このほか1万点余に及ぶ植物標本の「菅原コレクション」が資料として収蔵されており、今後これらの資料の整理を進めるとともに、この紀要をとおして報告をさせていただきます。

私達は、この地域に期待される博物館を目指し、館員一同努力いたしておりますが、このたびの紀要も、常設展、企画展、新収蔵展と積極的な事業展開をすすめる傍ら、調査研究という日々の努力を積み重ねてまいりました成果として、受けとめていただきたく存じます。また、この研究紀要が学芸員自らの研究成果となるばかりでなく、博物館に対する理解を深めていただき、今後ともご支援賜わりますようお願いする次第です。

平成5年3月31日

市立函館博物館長

木村 繁

目 次

序

資料調査余滴

描かれたデンビー一族

— 幻の北洋の覇者 — 1

写 真 図 版 30

館蔵貝類標本について

市立函館博物館所蔵の貝類標本

「高川コレクション」を中心に 33

写 真 図 版 46

資料受入調査余滴 描かれたデンビー 一族

— 幻の北洋の覇者 —

岡田 一彦

<はじめに>

平成元年（1989）1月12日で市立函館博物館に、北洋漁業⁽¹⁾の先駆者デンビー一族の肖像画と写真および関係資料が寄贈された。

北洋漁業で活躍し、函館駐在英国名誉領事を勤めたアルフレット・ジョージ・デンビー⁽²⁾一族に関する資料である。

その上、函館八幡坂に「デンビー商会」⁽³⁾の建物が残っており、土地の古老が谷地頭電車停留所⁽⁴⁾の正面の坂を「デンビーの坂」と呼んでいたことなどから、函館の博物館として、函館と縁の深いこの肖像画に描かれた主の調査を行うのが任務であり、将来、その結果を踏まえて当館や函館市北洋資料館での展示を考えなければならない。

しかし、予想に反してデンビー一族に関する資料や文献が少ないことに気が付いた。資料受入後、館務の合間を縫って少しずつ調査を進めてきたので、その一部を紹介したい。

「デンビー商会」について、会田金吾氏は、

『ウラジオストック、長崎、函館、北洋を結び漁業、毛皮の貿易、露国義勇艦隊⁽⁵⁾の代理業などを営んで巨利を得た。

初代デンビーはイギリス人の船長で長崎―露領間の海運業でもうけ、明治10年代にウラジオストックに商会を創立。その後、サハリン（樺太）漁業などの利権関係でロシアに帰化しコンブ採取やニシン漁業を営み、1896年（明治29）カムチャツカ漁業に進出した。2代目デンビーは多くの漁場を獲得し1910年にはドイツ製半動式缶詰機をもつ工場を建設し「堤商会」⁽⁶⁾を上回る生産をあげた。1914年（大正3）アメリカ製自動缶詰機、空缶機を導入。以後、1917年まで日露全業者の首位を占めたが、ロシア革命で資産は没収され経営難となり翌年「三菱」と提携し「北洋漁業」を設立。1922年「日魯漁業」との共同出資「大北漁業」となる。1924年、日魯に吸収された。』⁽⁷⁾

と述べている。

これらのデンビー資料の寄贈を申し出たのは、A・デンビー氏の夫人マリアの妹であるアンナの夫のロシア系米国人、コンスタンティン・プレーゾ氏⁽⁸⁾である。ロシアの画家

イリイン⁽⁹⁾の描いた一族の肖像画と、それと関連のある写真や風景画などで、その他ブレーゾ氏の資料も含まれている。

寄贈者のブレーゾ氏は、明治35年（1902）3月21日ロシアのウラジオストックに生まれ、昭和5年（1930）11月神戸に上陸、貿易商社ルリー会社に入社、東京・函館などに勤務、昭和9年東京の貿易商社マルクエル・グリンステン商会に勤務した。昭和14年にブレーゾ商会を設立したが、第2次世界大戦で同16年から休業、長野県に疎開した。昭和22年からエジャックトデンゲ・コンパニーやファーイスタントトレデンゲ・コンパニーの役員として貿易業に従事した。昭和26年に独立して横浜に有限会社オーヴァーシースサプライ社を設立し、昭和56年まで営業した。デンビー夫人マリアの妹アンナと昭和41年に結婚している。⁽¹⁰⁾

一方、この肖像画は長らく函館の入間川耕治家で預かっており、⁽¹¹⁾戦後鎌倉へ、それから軽井沢に運んだとのことである。

入間川耕治氏は、日魯漁業株式会社に勤めていたので、A・デンビーと親しかったようである。彼の長女が佐藤栄子氏で、三女が薮下八重子氏、彼女たちの姪が吉田和子氏⁽¹²⁾である。昭和61年頃、函館の吉田和子氏が軽井沢のブレーゾ氏の別荘に行き、A・デンビー夫妻の肖像画を見つけ、函館に縁の深い人の絵なので、ぜひ函館にと希望し、ブレーゾ夫妻も承諾した。

昭和63年3月、アンナが亡くなり、軽井沢の別荘の家財を整理することとなった。それに伴ってデンビー一族やブレーゾ氏関係資料をどうするかということについて、ブレーゾ氏は函館の意志を知りたいということで、佐藤栄子氏を通じて吉田和子氏に対応の催促がきていた。⁽¹³⁾

吉田和子氏は、5月25日に北海道新聞社記者の紹介で、当時の函館市教育委員会社会教育部長に相談した。⁽¹⁴⁾これは、当初北海道立函館美術館にも受け入れを申し出たが、歴史的に貴重な資料であるので、市立函館博物館に収まることとなった。

寄贈されたデンビー一族資料

NO	資料名	摘要	記録
1.	アルフレット・ジョージ ・デンビー肖像	グレン・アレクサンドロビッチ・イリイン画 94.0×81.8(116.0×89.5)	油彩 額装

- | | | |
|-----------------------------------|--|--------------|
| 2. マリヤ・イワノブナ
・デンビー肖像 | グレブ・アレクサンドロビッチ・イリイン画 油彩 額装(大型)
192.8×109.5(231.6×147.5) | アルフレッドの妻 |
| 3. マリヤ・イワノブナ
・デンビー肖像 | グレブ・アレクサンドロビッチ・イリイン画 油彩 額装(楕円)
59.5×46.0(71.0×57.1) | アルフレッドの妻 |
| 4. アンナ・イワノブナ
・バトリーナ・プ
レーゾ肖像 | グレブ・アレクサンドロビッチ・イリイン画 油彩 額装
80.8×65.5×(107.0×91.5) | アルフレッドの妻の妹 |
| 5. アルフレッド・ジョージ
・デンビーの妹の肖像 | グレブ・アレクサンドロビッチ・イリイン画 油彩 額装
73.5×50.0(99.5×77.0) | アルフレッドの妹 |
| 6. ミセス・ジョージ
・デンビー肖像 | グレブ・アレクサンドロビッチ・イリイン画 油彩 額装
82.0×66.0×(97.0×82.2) | アルフレッドの母 |
| 7. ミス・ユーズミラ
・リボウエッカヤ肖像 | 象牙画 油彩 額装(小型 中央楕円)
12.0×9.5(14.5×12.5) | アルフレッドの妻の妹の娘 |
| 8. ミス・ユーズミラ
・リボウエッカヤ肖像 | グレブ・アレクサンドロビッチ・イリイン画 油彩 額装(楕円)
43.8×35.7(58.0×45.8) | アルフレッドの妻の妹の娘 |
| 9. ミス・チーサン
デンビー肖像 | グレブ・アレクサンドロビッチ・イリイン画 油彩 額装(楕円)
43.5×35.5(58.8×51.0) | イワン・ジョンの娘 |
| 10. 置時計 | Yunghan 外装木製 | |
| 11. マリヤ・イワノブナ
・デンビー肖像 | 写真 額装(木製 彫刻あり)
25.8×20.3(28.0×23.3) | |
| 12. マリヤ・イワノブナ
・デンビー肖像 | 写真 額装(木製 彫刻あり)
32.5×21.2(25.5×39.0) | |
| 13. アンナ・イワノブナ・
ニーナー・プレーゾ肖像 | 写真(カラー) 額装(アルミ枠)
38.0×28.5(40.0×30.7) | |
| 14. マリヤ・イワノブナ
・デンビー肖像 | 写真(着色) 額装(木製 彫刻あり)
20.8×15.7(24.5×17.7) | |
| 15. ミス・ユーズミラ
・リボウエッカヤ肖像 | 写真 額装(楕円 木製金属メッキ枠)
20.8×12.5(23.0×15.3) | |
| 16. アンナ・イワノブナ
・ニーナー・プレ
ーゾ肖像 | 写真 額装(木製金属メッキ枠)
26.5×20.5(30.8×24.5) | |

- | | |
|---|--|
| 17. マリヤ・イワノブナ
・デンビー肖像 | 写真 額装(楕円 木製金属メッキ枠)
24.0×11.5(26.0×14.3) |
| 18. ミス・ユーズミラ
・リポウェッカヤ肖像 | 写真 額装(木製 彫刻あり)
27.3×28.8(30.0×23.7) |
| 19. ナタリヤー・イワノブナ
・デンビー肖像 | 写真 額装(木製 台付き 彫刻あり)
23.3×17.5(29.0×29.5台共) |
| 20. マリヤ・イワノブナ
・デンビー肖像 | 写真 額装(楕円 木製金属メッキ枠)
20.8×12.5(23.0×15.3) |
| 21. イワン・ジョン・デン
ビーとナタリヤー・イ
ワノブナ・デンビー肖像 | 写真 額装(木製金属メッキ枠)
29.5×19.0(33.1×22.4) |
| 22. ミス・ユーズミラ・リポ
ウェッカヤとミス・チー
サン・デンビー肖像 | 写真 額装(木製 台付き 彫刻あり)
12.5×17.8(17.0×26.6台共) |
| 23. ミス・チーサン
デンビー肖像 | 写真 額装(木製 台付き 彫刻あり)
21.8×17.5(26.4×18.3台共) |
| 24. マリヤ・クレプ
・スカヤー肖像 | 写真 額装(木製 金属)
14.5×11.0(21.9×18.7) |
| 25. アルフレット・ジョージ
・デンビー肖像 | 写真 額装(木製 台付き 彫刻あり)
15.5×10.3(24.8×16.6台共) |
| 26. ミス・ユーズミラ
・リポウェッカヤ肖像 | 写真 額装(木製 台付き 彫刻あり)
18.5×12.5(22.7×21.0台共) |
| 27. ミス・ユーズミラ
・リポウェッカヤ肖像
入りブローチ | 着色 額入(木製金属メッキ枠)
4.8×4.4(17.3×12.3) |
| 28. アンナ・イワノブナ
・ニーナー・プレー
ゾ肖像 | 写真 額装(木製 台付き 彫刻あり)
23.5×18.0(24.0×30.0台共) |
| 29. マリヤ・クレプ
・スカヤー肖像 | 写真 額装(楕円 木製金属メッキ枠)
15.2×9.6(17.2×11.8) |
| 30. ミス・ユーズミラ | 写真 額装(木製 彫刻あり) |

- ・リポウェッカヤ肖像 38.0×27.0(42.0×32.0)
- 31. アンナ・イワノブナ 写真 額装 (楕円 木製金属メッキ枠)
- ・ニーナー・プレー
ゾ肖像 20.8×12.5(23.0×15.3)
- 32. プレーゾー族肖像 写真2枚 額装(木製 二枚折)
16.7×10.6(32.4×17.0)
- 33. インクスタンド 1組 銀台付き
4.4×4.4(台15.2×23.2)
付 記念の書類入れ 祝福のサイン
- 34. 記念楯 銀製 馬蹄形 13.4×11.4
- 35. 卒業証書 ワシリースピソドノビッチ・プレーゾ宛
ロシア皇室ハルコ大学校 額装
29.0×41.2(41.9×51.3)
- 36. プレーゾ夫妻肖像 写真 昭和62年 額装
34.0×43.0(46.9×55.9)
- 37. 風景画 油彩 エム・ヒ・ヒューキン作 額装
31.5×24.0(45.0×37.2)
- 38. 風景画 油彩 作者不詳 額装
39.9×32.0(56.5×49.2)
- 39. アンナ・イワノブナ 写真 額装
- ・ニーナー・プレー
ゾ肖像 46.0×30.5(50.4×35.0)
- 40. ミス・チャーサン 写真 額装(木製 台付き 彫刻あり)
デンビー肖像 21.8×17.5(26.4×18.3台共)
- 41. ナタリヤー・イワノブナ 写真 1935年 額装(アルミ製)
- ・デンビー肖像 23.2×17.6(26.3×21.3)
- 42. ナタリヤー・イワノブナ 写真 1935年 額装(アルミ製)
- ・デンビー肖像 23.2×17.6(26.3×21.3)
- 43. 雲鶴 彫画 春山作 額装
21.5×23.8(41.8×44.8)
- 44. コンスタンティン 写真 1936年 額装

プレーゾ肖像	20.0×14.4(22.5×16.9)
45. プレーゾ一族写真	1966～1988
アルバム	33.3×29.5
46. アルフレッド・ジョージ	1921～1966
・デンビー一族写真	33.9×19.9
アルバム	
47. アンナ・イワノブナ	1966～1988
・ニーナー・プレー	33.3×28.0
ゾー一族写真アルバム	

＊資料名などは、プレーゾ氏のご教示による。

しかし、この一連の寄贈された資料の中には、A・デンビーの父親の肖像画が含まれていない。「堤清六の生涯」⁴⁵⁾によると、『函館のデンビー邸の書斎には、彼の両親の一对の七十号大の肖像画が飾ってある。父親は、北海道開拓使時代に、よく居留した英米人そっくりの顔をして、髯の濃い、輪郭の整った、慈愛に富んだ紳士といった型の人で、実業家というよりも、もっと何か空想的な牧師とでも思われる人物である』という記述があり、「北海の雲堤清六波乱の生涯」⁴⁶⁾には、ロシア革命で財産を失ったA・デンビーを、『八幡坂の邸で・・・デンビーは外出しようと、衣服を整えて、一度玄関にまで出て行き、また戻ってきた。暗い部屋の燭台にローソクをつけ、両親の肖像画の前に立った。一对の肖像画は七十号大で真直ぐにデンビーの方をむいていた。』と表現されている。

今回、多くの方々から聞き取りをしたが、この絵についての情報は全く入手できなかった。相当早い時期に大火などで消失してしまったものであろうか。当然イリインの描いたものではないが、残念なことである。

また、これらの肖像画と写真の構図が同じものまたは類似したものがある。例えば、1のアルフレッド・ジョージ・デンビー肖像画は25の写真と似た構図である。

そこで、イリインが函館に来たとき、デンビー一族が全員揃っていたのか、不在だった人は写真を基に描いたのではないか、また若い時の絵を写真を参考に描いてもらっていないか疑問をもった。

肖像画が描かれた年代は、イリインがロシア革命から逃れて、日本に来ていた大正6年(1917)から大正12年の間である。それで一族の肖像画の描かれた年齢と生年月日を照合してみると、A・デンビーの義妹アンナは、明治31年(1898)2月生まれで、プレーゾ氏によ

ると、『この4の絵は25,6才の頃のものだ。』という。とすると1923年頃の作となる。同じく8のミス・ユーズミラ・リポスカヤ肖像は、8才の時で彼女は大正3年(1914)8月に生まれている。同じく1922年の作となる。その上、プレーズ氏も、亡くなったアンナから函館で全部描かれたもののように聞いているという。また、シュウエツ氏⁴⁷⁾も、同じ考えで、日本の貨物船でA・デンビーらと3人でロシア革命から逃げてきた。そして函館に3~4週間滞在したが、その間にお礼として描いたものだという。短期間に描いたので確かに手を抜いている感じである。

一方、函館で描いたが、写真を見て描いたよさだという意見もあり、肖像画と写真を比較すると構造ばかりではなく、着衣なども同じものが含まれているので、デンビー一族が函館で、実際にモデルにもなって、写真も撮影し、その写真も使いながらイリインが速成の絵を完成させたのではなかろうか。A・デンビーの母森高テシや妹エリザベスの肖像はあるが、このときは既に亡くなっている。

これらの絵は、昭和9年(1934)の大火の直前に湯の川の屋敷に移され、焼失を免れた。

〔註〕

- (1) 北洋漁業の詳細については次回に譲り、ここでは北洋漁業の定義について、北洋とは、地理学上の名称ではなく、本邦の水産上本土を中心として日本沿岸を除いた北方の海を総称するのである。故に其の限界は劃然としていないが、朝鮮と露国の国境にある豆満江を通過する緯線(北緯42度)から北方、北海道、樺太、千島の沿岸を除きベーリング海、オホーツク海及び日本海北部の海洋である。

鮭鱒・鯨・鱈・蟹・鯨などが主な漁獲物である。(「函館市誌」 函館日日新聞社 昭和10年) そのほか「北洋鮭鱒」 岡本信男著 水産週報社 昭和31年にも、ほぼ同様のことが記載されている。

- (2) ALFRED GEORGE DENBIGH

各種の出版物は、ロシア語読みの「アルフレット・ゲオルギー・デンビー」とも記され、佐藤栄子氏によると、『通常、ロシア語読みの発音で読んでいたようだ。』とのことであるが、本稿では「ジョージ」を採用し、本文中は主に「A・デンビー」とした。

- (3) 現、北海洋裁学院(函館市末広町18-11)
 (4) 現在の函館市谷地頭町29番31番の間
 (5) ラシアン・ボランティヤ・フリート

平時は商船だが、戦争になると武装して軍艦の補助として使う。海軍軍律の下に置き、国際法上は軍艦として扱う。ロシアはウラジオストックからカムチャツカまで義勇艦隊を就航させ、寄港地が函館で、デンビー商会が代理をやっていた。大正3年(1914)には30余隻いた

といわれる。

- (6) 明治39年(1906)、堤清六と平塚常次郎が、沿海州アムール(黒龍江)河畔、北緯53度のブロンゲ岬で出会ったのを機に創立した。新潟市に看板を掲げ、翌年カムチャツカに帆船で出漁し、以後函館に事務所をおいた。明治43年カムチャツカに日本人として初めて缶詰工場を建て、大正4年(1915)函館で空缶事業を始めている。
大正8年(1919)「極東漁業」に改組し、翌年には「輸出食品」と合併、同10年に「日魯漁業」「勘察加漁業」と合併し、新「日魯漁業」(会長堤清六)が発足した。
- (7) 『デンビー商会』(会田金吾)「北海道大百科事典」北海道新聞社 昭和56
- (8) P U L E Z O K O N S T A N T I N
本人は、プレゾまたはプレーゾと書くが、本稿ではプレーゾに統一した。平成3年(1991)4月26日に亡くなられた。
- (9) グレブ・アレクサンドロビッチ・イリイン (Greb Alezandrovich Ilyin)
「クルスカヤ・ジズニ」(米国サンフランシスコ日刊紙)
1889年、ロシアのカザン市の古い貴族で軍人の家庭で生まれた。中等教育を終えると、ペテルブルグの美術学校に学んだが、ロシア革命(1917)ののち、多くの難民とともにシベリアに逃れ、極東を経由して日本へ避難した。ここで自分の美術的才能を磨きつつ、数年を過ごしている。1923年家族とともに、アメリカに移住してサンフランシスコに落ち着いた。
ここでは好きな芸術の道に専念し、大きな評判を得て、多くの顧客を得ている。ボヘミアンクラブの会員にもなっている。その他、ロシア系移民のためロシアセンター設立に尽くし、初代会長に就任している。歿年不祥10月15日死去。
- (10) ケ・プレーゾ氏履歴書
- (11) 薮下八重子氏談
- (12) 吉田和子氏の伯母佐藤栄子氏(東京・渋谷在住)の母親(入間河耕治夫人)が、A・デンビーの妻マリヤさんと友人であったことから、佐藤栄子氏もプレーゾ氏と交流があり、その関係で吉田和子氏と接触があった。
- (13) 函館で受け入れない場合は、神奈川県立博物館や横浜市、または地元の博物館(軽井沢)寄贈することも考えており、実際に話もあったという。
- (14) 「英国領事館函館駐在名誉領事デンビー夫妻の肖像画に係わる情報について」
函館市教育委員会社会教育部 昭和63年5月25日
- (15) 「堤清六の生涯」内藤民治編著 日魯漁業kk曙光会 昭和12
- (16) 「北海の雲 堤清六の生涯」岡本信男著 昭和62
「堤清六の生涯」を土台に小説家したものようだが、当時函館では電灯がついていた。電気がない部屋か?
- (17) S H V E T S 氏(東京都住)元函館のカール・レイモン氏の所にいたことがある。

〈初代デンビー〉

本稿ではデンビー一族の主である初代デンビーを除くことはできない。前項で述べたように、イリインの作品ではない初代デンビーの肖像画に関心をもったが不明である。

初代デンビーは、天保11年（1840）、スコットランドで生まれたとされている。⁽¹⁾ウラジオストックの新聞「HPACHOE ЗНАМЯ」の〈スベトランスカヤ通りの野心家〉⁽²⁾に、初代のデンビーのことが記されている。その要旨は、

『漁業家であるG. F. デンビーは、ウラジオストックの長老として尊敬されていた。

しかし、デンビーは若いころに南の海で海賊行為をしていたと噂があったが、人々はそれを喜んで信じていた。彼の多い顔や賢そうな生き生きした目を見ていると、デンビーは多くの経験を有する人だと感じる。また、短い会話の中にも、彼が実に教養の高い人であることが分かる。

彼はスコットランド人として、イギリスで素晴らしい教育を受けたが、極貧の生活から逃れるため、彼はイギリス植民地へ行くことにした。デンビーは、中国のチーフに行き沿海地方の土地の豊かさを聞いた。それで彼は小さな船をチャーターして、中国に本拠を置き昆布探しをさせた。

その後、デンビーはウラジオストックへ行き、当時人口が数百人という新興都市に住むことを決めた。彼は土地を買って、正面がスベトランスカヤ通りに向くようにして家を2軒建てた。そして、漁業という有益な事業に携わるとい希望を捨て去ることができなかった。

やがてデンビーは、ウラジオストックの最初の市民で、沿海地方で海藻採取の開拓者として見做されているY. L. セミヨノフを紹介され、1877年セミヨノフ商会という合併会社が誕生した。

デンビーは、樺太に8年いたが、魚と魚粕肥料の事業で頑張ったが、実績が上がるまでセミヨノフ氏は資金を出すことを断ってきた。

手始めに私は、鱈取りを行い、アイヌもこの漁を始め、アイヌは鱈を煙草・布・米と物々交換をした。このような方法でデンビーは捕ったり、干した鱈を大量に船で日本へ送り、当時としては大金の一山4000円で売った。

それと同時に昆布取りの仕事は順調に進んでいた。

ゲオルギー・フィリップovich・デンビーは、1916年11月2日ホノルルでこの世を去った。

デンビーには、2人の息子が残り、彼等は成功した父の仕事が続けていた。しかし、勃発した露戦争のため財産全部を失った。そのとき、ゼロから始めようと決心してカムチャ

ツカへ引っ越した。

ソビエト政府に、外国の会社のカムチャツカ使用权の問題が起こった時、ウラジオストック市極東魚野獣生業局に勤めていたアルセーンチエフは、外国人の日本人と契約を結ぶより、デンビー兄弟を推薦し、彼等と協力した方がよいと勧めた。

新経済政策と弾圧の時代が終わった後、デンビー兄弟の軌跡が失われた。今もわれわれの街、ウラジオストックの引き立て役であったデンビー兄弟の家は、彼等のよい思い出を残している。⁽³⁾

また、A. T. マンドリク氏の「19世紀-20世紀初頭におけるロシア漁業に果たしたデンビー一家の役割」⁽⁴⁾にも同様のことが書かれている。

現在ウラジオストックの筆者に問い合わせ中なので、今後著者の経歴や研究、その他資料やデンビー商会の残した財産などについての詳細について判るかも知れない。

まず、フルネームであるが、これも正確なところは判らなかつた。今田正美氏の「カムチャツカ夜話(その1)〈デンビー商会のこと〉」⁽⁵⁾や「日魯漁業株式会社社史」⁽⁶⁾には、『大正5年長崎で78才の生涯を閉じたと聞く。初代デンビーのフルネームが分からず』とあり、どの文献にも明確に記されていなかった。プレーズ氏は、ジョン・ジョージ・デンビーではないかといっていた。

IN LOVING MEMORY
GEORGE PHILIPPS DENBIGH
WHO DIED NOV 15 1916 AT HONOLULU
AGED 78 YEARS
AND
OF HIS WIFE
ANNA
WHO DIED DEC 27 1909 J NAGASAKI
AGED 54 YEARS

しかし、「НРАСНОЕ ЗНАМЯ」の〈スベトランスカヤ通りの野心家〉によると、「Георгий Филиппович Дембиг」(ゲオルギー・フィリップピチ・デンビー)、A. T. マンドリク氏は、「George Philip Denbigh (ゲ

オルギー・フィリップヴィチ・デンビー)としている。しかし、長崎の新坂本国際墓地の碑⁽⁷⁾には、「GEORGE PHILIPPS DENBIGH」(ジョージ・フィリップス・デンビー)と刻まれていて表記が一定していない。普段は「ジョージ・デンビー」と呼んでいたとの話もあり、墓碑から「ジョージ・フィリップス・デンビー」を採用し、本稿では「初代デンビー」とする。

生年月日も天保11年(1840)説と、一部1838年説がある。新坂本国際墓地の墓碑には、大正5年(1916)11月15日に78才で亡くなったと記されている。

1840年生まれ、76才死去説をとっているレイン・アーンズ氏に問い合わせ中であるが、明確な回答を得ることができなかつたので、1838年説を採用したい。

初代デンビーは、学校は英国で学び、貧困な生活から抜け出すため、イギリスの植民地に出た。「夫人との問題だろう」と推測する人もあるが、本国に居られなくなって東洋に来たようである。貴族出身とも言われている。

最初中国を本拠地にしてしたが、帆船の水夫をして長崎にきたおり、ドイツ人の船長ナヤサン⁽⁸⁾に見いだされ、彼の所有する帆船の水夫長兼秘書となったとのことである。ナヤサンは、明治初め頃、長崎を根拠地としてウラジオから沿海州間を行き来して取引を行っていた。明治10年(1877)、ナヤサンの船が樺太真岡で遭難し、デンビーはここに滞在した。そのときに沿岸の昆布が豊富なことに気付き、翌年早速ナヤサンに資本を出させて、中国に輸出して利益を上げた。⁽⁹⁾

やがてウラジオストックに家を造り、アレウト⁽¹⁰⁾という小さい船で、樺太の昆布の取引をしていたが、ウラジオストックのユダヤ人の高利貸しのセミヨノフの出資を得て、セミヨノフ・デンビー商会を設立し、大がかりな昆布採集を始めた。明治11年、中国のチーフーに市場を見だし利益を上げた。⁽¹¹⁾

このセミヨノフ・デンビー商会設立前後が定かではない。A. ДИ НОВ氏の明治10年が設立とすれば、真岡の遭難の年が同じく明治10年ではなく8年頃にしなければならない。会田金吾氏によれば、「明治11年(1878)、函館のセミヨノフ・デンビー商会、(樺太)西海岸で昆布採集を営む。デンビーの漁業進出の始まり。」⁽¹²⁾とされているので、真岡の遭難をどうしても1、2年溯らせなければならない。

また、初代デンビーが、明治10年チーフーでヤーコフ・ラザレヴィチ・セミヨノフと出会い、翌年真岡のセミヨノフ商会の支配人となり、明治23年(1890)代になってセミヨノ

フ・デンビー商会となったともいわれている。明治24年から36年までの間に毎年4千から7千石の昆布を積み出した。¹³

そのほか、明治8年(1873)5月、日露両国間に、千島列島とサハリンとの正式交換があつて以来、樺太における営業上、ロシア人でなくては、都合の悪いことがおこつたので、ついに初代デンビーは帰化している。つまり、事業を継続して行くのには、イギリス人では資本の操作などがしにくかつた。しかし、この帰化した年代も不明で、明治11年頃までと思われる。

初代デンビーは鯨に目を付けたがセミヨノフは魚肥を嫌って出資せず、初代デンビー単独で行つた。鯨は鯨粕にして日本に売つて利益を得た。この鯨漁については、初代デンビーの部下の新井田喜四郎¹⁴の進言によるといわれる。初代デンビーらには鯨肥料のことは判らず、またセミヨノフ・デンビー商会の日本人漁夫は長崎出身で同じく判らず、他の韓国人や中国人では誰も気付かなかつたことであつた。¹⁵

よつて、長崎と露領間の海運業で儲けた¹⁶ともされているが、昆布と鯨が初代デンビーの第一歩であつたろう。

「サハリン紀行」(アントン・チャーホフ)の中に、明治23年(1890)頃の真岡(ホルムスク)のことを記したところがあるが、『今では、昆布業はロシアの商人セミヨノフが占有して、彼の息子はいつでもマウーカに住んでいる。実際の仕事は、スコットランド人のデンビーという、もはや若くはないが、見たところ物知りな男が処理している。彼は、日本の長崎に自分の家を持っていて、私が彼と知り合いになつたとき、私が確か秋には日本へ行くだろうと話したら、彼は愛想よく、彼の家に滞在してもらいたいと言ひ出した。ロシアの移住者が、ここへ出稼ぎに来るようになったのは、まだ、ほんの明治19年(1886)からのことで、彼も確か自分一個の意志で来たらしい。』¹⁷とあり、その人柄が僅かに偲ばれる。

明治29年(1896)になると、セミヨノフとは別に、カムチャツカのカム河で操業していたコーチック会社と提携し、初めて日本人46人を雇用し、塩鮭にして9月には7千尾を函館に運んだ。¹⁸これがデンビー商会のカムチャツカ進出の第一歩であつた。

やがて、明治30年頃には、オゼルナヤ河・アワチャ湾に引き続きコーチック会社と共同で漁場21カ所を経営しているが、実際の業績というものは、出費がかさみ、結局赤字の方が多かつたのである。

また、捕鯨にも手を出した。小倉基ということ者が、許可を得てアニワ湾で明治29年から操業していたが、初代デンビーは明治32年提携して、ノルウェー式捕鯨船法を採用し好

調であった。しかし、鯨肉需要が少なく失敗に終わった。⁽¹⁹⁾

ロシア政府は、明治32年沿海州、黒龍江総督府管海産業仮規則発布を発布し、日本人漁夫の使用を禁止した。翌年から日本式の塩魚製造ができず、日本の漁師のような建網を使う沿海漁業ができなくなった。一方これによって樺太西海岸の優良鯨漁場を10年契約で賃下げされ、明治36年頃には23の漁場を経営していた。⁽²⁰⁾

明治37年2月10日、⁽²¹⁾日本がロシアに宣戦布告し、日露戦争に突入した。旅順など遼東半島の戦い、翌年の奉天や日本海海戦を経て、7月7日に日本軍は南樺太に上陸、31日には樺太のロシア軍が降伏した。8月10日からポーツマスで始まった日露講和会議が9月5日条約調印となった。その中に樺太北緯50度以南を日本に割譲することおよび沿海州沿海での日本の漁業権を認めるという内容があったが、これには初代デンビーの動きがあったのである。

マウーカが真岡となり、国籍がロシアのデンビーの漁区は没収されることになる。この樺太の10カ年の漁業権が120万円日本政府に買い上げられる。

「堤清六の生涯」には、『彼は、講話談判開始の直前にパリへ急行した。戦争に負けたにもかかわらず、悠然と、大名行列でポーツマスまで、練り込もうとするウィッチ全権を待ち受け、相当の手段を尽くして嘆願書を差し出した。つづいて講和条約の内容に感づいた彼は、請願の片手落ちになることを恐れて、小村全権にも会見を求めた。百方奔走した結果、いよいよ講話調印となったのち、彼は樺太における10カ年の漁業権は、日本政府によって買い上げられるということになった。』『この内90万円がデンビー商会のものとなり、それでカムチャツカでの資金となった。』⁽²²⁾ 『ロシアの全権ウイッテ伯渡米の前にパリで会見し、サガレンの漁業の沿革と現状を説明し善処を求めた。初代デンビーを一行に加えてポーツマスに赴き、顧問格として扱われる。……約半額以上がデンビー商会の所得となった。』⁽²³⁾ とあり、初代デンビーの機を見るのが敏であることが判る。

また、明治40年の日露漁業条約で、露領の漁業権は日本が獲得したが、海面だけで河川および入江は繁殖保存地域として漁業が禁止された。これも初代デンビーによるものといわれる。⁽²⁴⁾

初代デンビーの協力者として、明治20年代には、この新井田喜四郎のほか柳谷仁三郎・篠原信太郎・新京清次郎・森高伊助などが活躍した。

また、ウラジオ港⁽²⁵⁾のキタイスカヤ街⁽²⁶⁾に大ビルディングを建てたり、カムチャツカのカム河からさかのぼったネルピーチ湖のほとりにデンビー街を造った。

後に述べるが、長崎からきた森高という女性と、初代デンビーは結婚した。そして5人

の子供を持った。長男はA・デンビーで、4男1女である。²⁷⁾

長崎の初代デンビーの家は、かつての旧グラバー邸などのある外国人居留地の²⁸⁾長崎市南山手町にあったが、現在明治村に移築している。棟札によると明治22年8月に建てられたもので、当時外国人居留地にあったことで、ここは明治32年の条約改正まで外国領事団によって管理されていた。商館や住宅は通称土地番号で呼ばれ、この家の名称は、長崎居留地二十五番館の名称になっている。長崎に残るいくつかの外国人住宅と同様に、三方にベランダを配しているが、明治43年(1910)3月別館が増築されている。

最初英国人で三菱長崎造船所の初代支配人に就任した技師J. F. コールドが建て、つづいてロシア義勇艦隊のマネージャー、グズメントが住み、昭和の初期まで外国人の住居として使われた。この頃が初代デンビーの住まいであったと思われるが、以後海軍、戦後は大蔵省の職員宿舎となっていた。²⁹⁾

長崎の家のほかに、函館の谷地頭町に邸宅があり、デンビー一家は殆どここに住んでいた。³⁰⁾ 電車の終点から真っ直ぐ函館山の方に向かった登り坂の右側全部だった。³¹⁾

初代デンビーは、「長崎で没した。」³²⁾とされていたが、大正3年(1914)に結婚した娘エリザベスの夫で、函館英国副領事エドワード・ゴートンがハワイ英国領事館の領事に就任、同年暮れに娘夫婦と同伴してホノルルに移住した。そして2年後大正5年(1916)11月15日に心臓疾患のため亡くなった。ハワイで葬式を済ませ、火葬にふして、長崎に移送し、先に亡くなった妻の傍らに埋葬した。³³⁾大正6年(1917)のロシア革命による没落を知らずにの死去であった。

[註]

(1) Across the Gulf of Time

—The International Cemeteries of Nagasaki—

Lane R. Brian Burke—Gaffner 長崎文献社 平成3年

(2) 「スベトラスカヤ通りの野心家」 A. ЛИНОВ (НРАСНОЕ ЗНАМЯに掲載)

(3) 翻訳協力 アーラ・ミハイレンコ氏 (函館市国際交流課) ほか

(4) 提供 清水 恵氏 (函館市史編さん室)

「19世紀—20世紀初頭におけるロシア漁業に果たしたデンビー一家の役割」

A. T. マンドリク 1992 金森ホール 講演要旨

(5) 「カムチャツカ夜話 (その1) 〈デンビー商会のこと〉」 今田正美著

(海峡135号) 海峡評論社 昭和45年1月

- (6) 「日魯漁業株式会社社史〈デンビー商会の話〉」 今田正美著
日魯漁業株式会社 昭和39年
- (7) 新坂本国際墓地72番の1と2
- (8) 北ドイツ出身、明治初年から長崎を根拠地として、ウラジオストックから沿海州を密貿易をしていた帆船の船主兼船長で、海賊行為もしていた。明治22年没。初代デンビーは遺児2人を引き取って、函館で教育し、一人は自分の養子とし、一人はナヤサンの相続人として商会の事務を執らせた。彼の碑は、真岡にあるらしい。
- (9) 「樺太史談〈真岡物語〉」小野隼・西村政雄編 北斗社 昭和49年
- (10) 聞き取り調査の際、アレウト号について、初代デンビーの船と明治10年(1877)瀬棚で座礁し、12名が死亡したロシアの軍艦と混同されていた方がおられた。
- (11) 「日魯漁業経営史」 日魯漁業株式会社 昭和46年
- (12) 「漁り工る北洋漁業」 会田金吾著 五稜出版社 昭和63年
- (13) 「日魯漁業株式会社社史〈デンビー商会の話〉」 今田正美著 日魯漁業株式会社 昭和39年
- (14) 新井田喜四郎は南部大畑の出で栖原家に仕え、東海岸の支配人まで勤めていたが、栖原の樺太引揚後、明治18年真岡で密漁をしているうち破船し、デンビーの厄介になっていた。その後デンビーの部下として働くようになった。明治26年没。
- (15) 「樺太史談〈真岡物語〉」 小野隼・西村政雄編 北斗社 昭和49年
- (16) 「函館・道南大事典」南北海道研究会 国書刊行会 昭和60年
- (17) 「堤清六の生涯」 内藤民治編著 日魯漁業kk曙光会 昭和12年
- (18) 「カムチャツカ夜話(その3)〈サガレンのデンビー商会〉」
- (19) 「漁り工る北洋漁業」 会田金吾著 五稜出版社 昭和63年
- (20) 「カムチャツカ夜話(その3)〈サガレンのデンビー商会〉」
今田正美著 (海峡137号) 海峡評論社 昭和45年5月
- (21) 実際には、2月4日の御前会議で軍事行動を決め、8日に戦闘状態にあった。
- (22) 「堤清六の生涯」 内藤民治編著 日魯漁業kk曙光会 昭和12年
- (23) 「カムチャツカ夜話(その4)〈デンビーとポーツマス条約〉」
今田正美著 (海峡138号) 海峡評論社 昭和45年7月
- (24) 「北海の雲 堤清六波乱の生涯」 岡本信男著 昭和62年
〈日魯漁業協約明治40年9月11日公布〉
- 第1条 露西亞帝國政府ハ本条約ノ規定ニ依リ、河川及入江(インレット)ヲ除キ日本海、「オコーク」海及「ベーリング」海ニ瀕スル露西亞國沿岸ニ於テ膾炙及臘 虎以外ノ一切ノ魚類及水産ヲ捕獲、採取及製造スルノ權利ヲ日本國民ニ許與ス、前記入江ハ本格的附属議定第一條除之ヲ列挙ス。

- (25) 19世紀末、ロシアは膨大な国費をつぎ込んで、軍港兼商港としてのウラジオストックを整備してきたが、これも完成し、シベリア鉄道が結ばれる計画もあり、長崎との往来も頻繁であった。また、ウラジオストックの人達の避寒地ともなっていた。
- (26) スベトランスカヤ通りの旧名でデンビー街の異名
- (27) 「カムチャツカ夜話（その2）〈デンビー商会発祥記〉」には3男2女とある。
家族揃っての写真の服装から判断したものか。
- (28) 「明治時代の外国人居留地地図」 長崎市教育委員会管理部文化財課提供
長崎市教育委員会の柿森和年氏のご教示による。
- (29) 「長崎南山手25番館メモ」 東京大学生産技術研究所 昭和41年5月24日～28日「博物館明治村ガイドブック」 明治村 昭和63年
- (30) 「時の流れを越えてー長崎国際墓地に眠る人々ー」 レイン・アーンズ, ブライアン・バー
クガニ共著
- (31) 三島義堅氏談 (1978.9)
- (32) 「北洋の庭 19 〈チェーホフの会った英国人〉」 北海道新聞 昭和43年8月24日「カムチャ
ツカ夜話（その1）〈デンビー商会のこと〉 今田正美著
(海峡135号) 海峡評論社 昭和45年1月
- (33) 「時の流れを超えてー長崎国際墓地に眠る人々ー」 レイン・アーンズ, ブライアン・バー
クガニ共著

〈アルフレッド・ジョージ・デンビー〉

2代目のA・デンビーは、初代デンビーの長男で、生年月日・没年および出生地に異説がある。

「カムチャツカ夜話（その2）〈デンビー商会発祥記〉」⁽¹⁾では、『(初代デンビーは)明治14年に長崎で長男をあげているから、結婚はその前年とすれば42才の晩婚というわけ・・・』と、明治14年（1881）説を挙げ、「日魯漁業株式会社史」⁽²⁾や「函館名士録」⁽³⁾では、明治13年（1880）説を、そして墓碑には1879年（明治12）1月25日と刻まれている。特に「函館名士録」では、真岡で生まれたことになっている。この「函館名士録」の記事をA・デンビーは見ていると思われるので、正しいと見たか、誤りと見たか興味がある。

A・デンビーは、東京築地サマス学校を卒業し、英国のロンドン大学に学び明治33年（1900）に函館に帰ってきた。⁽⁴⁾ 英語・ロシア語・日本語・中国語が達者であった。⁽⁵⁾

趣味は、魚釣りや狩猟・園芸などで、日本人人夫を連れてラッパを吹きながら山に入るといわれ、⁽⁶⁾ その釣りの竿を若山徳次郎氏⁽⁷⁾ が所蔵している。

このA・デンビーは、セミヨノフ・デンビー商会などにも勤め、父親から事業の方法を習い覚えていた。やがて、初代デンビーが、大正3年（1914）ゴートン夫妻に同伴して、ホノルルに行ったときから完全に事業を引き継いだことになる。しかし、実際は明治41年（1908）頃から、A・デンビーが中心になって、デンビー商会を切り盛りしていたようである。特に明治42年、初代デンビーが独立して、函館とウラジオストックにデンビー商会を創設したのち、⁽⁸⁾ 冬を過ごすために娘とオーストラリアに出掛けていることは、A・デンビーにこの間のことを任せていたであろうし、この不在中に妻を失っているので、精神的打撃も大きかったであろう。

この頃、ウラジオストックのセミヨノフ商会が函館にも支店を設け、日本と盛んに貿易していた。A・デンビーは彼と手を結び事業を拡げる。

明治41年ウス・カムに進出、漁場の権利を取って漁業に着手、⁽⁹⁾翌年にはカムチャツカ河口から遡ったネルビーチに基地を建設し、倉庫・商店・冷蔵庫・病院・農園・缶詰工場などを作って行った。⁽¹⁰⁾

明治43年には、工場を拡張して新機械を購入しドイツ製半動式缶詰機をもつ工場を建設し、明治45年にはドイツ製の機械を入れたもう一つの工場を建て、大正3年（1914）になるとアメリカ式自動缶詰機、空缶機を導入した。⁽¹¹⁾ それによって鮭缶詰の生産量は著しく増加した。

デンビー商会の鮭缶詰製造は¹²⁾

年 度	製 造 高	工場数
明治43 (1910)	9,200函	1
明治44 (1911)	18,764函	1
大正元 (1912)	24,170函	2
大正 2 (1913)	54,322函	2
大正 3 (1914)	55,000函	2
大正 4 (1915)	105,000函	2
大正 5 (1916)	137,109函	2
大正 6 (1917)	189,640函	2

これらの事業の協力者として、フリサンフ・ブラノーウィッチ・ビリチ（ロシア人名義人）、五十嵐藤意、クルマレンコ（ロシア人技師）、サーゲン（ノルウェー人技師）、プラオン（ノルウェー人技師）、ドクトル・バー、タイルマン（ドイツ人出資者）、福浦岩吉、新京清次郎、中嶋貞次郎、石川与一、北尾政吉、森高伊助などがいた。

他に、カムチャツカ河流域の人達に対する生活物資の販売、漁獲物の買い集め、毛皮の貿易、ロシア義勇艦隊の代理店、保険代理業などを兼業した。

大正2年（1913）5月2日付の「函館新聞」によれば、大正2年4月28日ノルウェー領事館が、函館市会所町15のデンビー商会内に設置され、クーパー副領事が就任した。この

領事館は大正10年12月23日閉鎖され、デンビー副領事も解任されている。⁽¹³⁾デンビーは、大正6年12月副領事事務取扱、翌年3月副領事になっている。⁽¹⁴⁾

4、5年前からあった函館大町東坂下の「セミヨノフ・デンビー商会」の事務所が、明治40年(1907)に焼失したので、弥生坂の石垣隈太郎商店に移転し、大正2年八幡坂に「デンビー商会」の事務所を新築した。内外とも純洋風で、⁽¹⁵⁾2階でダンスをするので床にオガクズを入れていた。⁽¹⁶⁾土曜は半休、日曜は全休、正午から午後2時まで昼休みという、当時としては函館の人々に驚きの目で見られていた。⁽¹⁷⁾

カムチャツカ、樺太などに工場や支店を持っており、⁽¹⁸⁾ウラジオストックのキタイスカヤ街には堂々たるビルを引き続き所有していた。

A・デンビーの函館の邸宅も、初代デンビーから引き続き谷地頭電停の突き当り右側にあり、最初石垣がなかったが、昭和9年の大火前に星野清次が1万円で造った。やがて、この屋敷を宮崎信太郎に売った。⁽²⁰⁾昭和9年に焼失していることになる。

また、昭和9年頃、デンビーの屋敷が湯の川の松倉川畔にあった。⁽²¹⁾ちょうど現在の御園ホテルの近くで、⁽²²⁾後に「国ノ子寮」が使用した建物であるが、⁽²³⁾取り壊して現在は無い。ここでA・デンビーは、上海に亡命するまでの数年を過ごしている。

このほか、カムチャツカ河口の両缶詰工場の中に立派な住宅を造っていたともいわれる。⁽²⁴⁾

大正6年(1917)11月に起きたロシア革命の波がカムチャツカに押し寄せたのは、大正7年5月であった。これは「デンビー商会」の没落を意味した。ウラジオストックでのビル・証券・株式など私有財産が没収され、シベリア商業銀行の株式150万ルーブルとカムチャツカの漁業権と工場、函館の不動産と動産だけが残った。⁽²⁵⁾

翌年4月8日、三菱と提携して北洋漁業株式会社を設立したが、A・デンビーの権利は3分の1となり、取締役となった。大正11年(1922)日魯漁業との共同出資の大北漁業株式会社となるが、大正13年日魯漁業株式会社に吸収される。

大正11年、ソヴィエト連邦の成立とともに漁業権を没収され、A・デンビーは貿易商となり、昭和9年(1934)には函館市長から海産物輸出功労者として表彰されている。⁽²⁶⁾

この没落への道の中で、ロシア革命を避けてきたマリアと知り合い結婚し、同じイリインによる肖像画が残された。

「函館郷土暦」(元木省吾編)によると、昭和9年12月31日に函館英国領事館が閉鎖され、翌年昭和10年1月1日A・デンビーは函館駐在英国名誉領事に就任している。

昭和8年から15年頃のデンビーは、函館貯蓄銀行ビル3階²⁷⁾に事務所を構え、昭和12年に発行された「北洋の開拓者 平塚常次郎君」²⁸⁾の序文を書いている。

この英国領事館も昭和14年(1939)には閉鎖され、²⁹⁾湯の川に住んでいたが、やがて世情が変わり、日本に住みにくくなって、アンナとその母親と3人で上海に逃れた。

佐藤栄子氏が昭和15年函館に戻ったとき、アンナの妹マリアだけが湯の川に住んでいた。まだ、ロシアと戦争していなかったため、日本に居ることができたのではないと思われるが、17年頃には、日本から上海へ亡命したようだ。

上海での生活は悲惨だったようで、亡命の際日本から持っていった財産は、全部日本軍に没収され、収容所生活も味わったようであるが、A・デンビーはそのことに触れられることを非常に嫌い「忘れた」と言っていたとのことである。

A・デンビーは、戦後の日本に戻るが、多分横浜に上陸し、その後鎌倉の妙本寺近くに住んだが、程なく今井某という女性の世話で鎌倉の笹目にあった都筑忠春氏の邸宅に住むことになった。³⁰⁾

英国籍のA・デンビーが2階を借り、都筑邸は進駐軍の建物接収を避けることもできた。そこには、最初A・デンビーは夫婦で住んだが、やがてマリアの母と妹も同居した。A・デンビーは、今井某を使って、東京・横浜・横須賀のアメリカ軍の酒舗から煙草・缶詰・砂糖等を手に入れ、それを日本人に流して、その利益で生活していた。米軍から「ミスター・デンビーは霞を食べている」といわれるほど生活が苦しかったそうである。

日々の生活は、目まで毛の垂れた小さな犬を連れて1人で散歩する姿が見られ、夫人とは一緒に歩くことはなかった。犬に向かって「ヤチダモイ」(早く帰って来い)と叫んでいたのが思い出される。なにしろ、非常に温厚な人であったと都筑忠春氏はいう。

函館にも1、2度来たといわれているが、このとき今回函館博物館に寄贈された油彩画を鎌倉に運んだと思われる。

昭和27年頃、A・デンビーと都筑忠春氏が、2階で話をしている最中、突然涎(よだれ)を垂らしはじめ、椅子から転げ落ちた。都筑氏は、すぐに妻と妹を呼び、医者呼んだ。1年ぐらい植物人間のように寝たきりで昭和28年11月1日に亡くなった。結果的に脳溢血の様なものであったのだろう。

昭和27年4月1日から安養院³¹⁾の墓地に埋葬管理されいたといわれる³²⁾A・デンビーとイワン・ジョン・デンビーの兄弟とアンナの母マリア・クルスカヤの3人の遺骨が、昭和63年6月3日付けで改葬の許可証が発行され、プレーズ氏とその委任を受けた久保田泰弘氏³³⁾の努力により横浜外国人墓地に改葬された。

[註]

- (1) 「カムチャッカ夜話 (その2) 〈デンビー商会発祥記〉」 今田正美著
(海峡136号) 海峡評論社 昭和45年3月
- (2) 「日魯漁業株式会社社史 〈デンビー商会の話〉」 今田正美著
日魯漁業株式会社 昭和39年
- (3) 「函館名士録」 深井清蔵著 昭和11年
- (4) 「函館名士録」 深井清蔵著 昭和11年
- (5) 「カムチャッカ漁業の回顧(1)」 沢井誠二著 (海峡133号)
海峡評論社 昭和41年5月
- (6) 大川一男氏談 (1978.12)
- (7) (株)五島軒会長
- (8) 「時の流れを超えて—長崎国際墓地に眠る人々—」 レイン・アーンズ, ブライ
アン・パークガニ共著
- (9) 「カムチャッカ漁業の回顧(1)」 沢井誠二著 (海峡133号)
海峡評論社 昭和41年5月
- (10) 「カムチャッカ夜話 (その5) 〈デンビー商会基本調査に力を入れて着業〉」
今田正美著 (海峡136号) 海峡評論社 昭和45年3月
- (11) 缶詰工場
ネルビーチ湖畔 明治43年 (1910) 技師長サーゲン 380人
半自動式機械 旧缶詰所
海面漁区245号 大正元年 (1912) ノルウェー人 380人
機械製 新缶詰所
機械は殆どドイツ製であった。
- (12) 「日魯漁業株式会社社史 〈デンビー商会の話〉」 今田正美著
日魯漁業株式会社 昭和39年
- (13) 函館新聞大正11年1月9日付
- (14) 下村富士男氏の調査による。
- (15) 「カムチャッカ夜話 (その1) 〈デンビー商会のこと〉」 今田正美著
(海峡135号) 海峡評論社 昭和45年1月
- (16) 土井多紀子氏談 (1982.5) 但し, A・デンビーの函館の邸宅や事務所などは, 谷地頭ほか
会所・東浜・末広・湯の川など各町にあり, 年代によって移動があるので, どこの建物
かは, 明確に聞くことはできなかった。
- (17) 「カムチャッカ夜話 (その1) 〈デンビー商会のこと〉」 今田正美著 (海峡135号) 海峡評
論社 昭和45年1月
- (18) 「日魯漁業株式会社社史 〈デンビー商会の話〉」 今田正美著
日魯漁業株式会社 昭和39年

- (19) 三島義堅氏談 (1978.9)
- (20) 大川一男氏談 (1978. 12) 昭和11年頃は根崎町120番地
- (21) 藪下八重子氏談 現在は湯の川3丁目10番4号
- (22) 「北洋の庭 20〈デンビー挫折〉」 北海道新聞 昭和43年8月25日
- (23) 「カムサッカ漁業の回顧(1)」 沢井誠治著 (海峡136号) 海峡評論社昭和41年5月
- (24) 「日魯漁業史」 日魯漁業株式会社 昭和46年
- (25) 「函館名士録」 深井清蔵著 昭和11年
- (26) 岡田弘子氏談 当時末広町14番地
- (27) 「北洋の開拓者 平塚常次郎君」 北海商報社 昭和11年
- (28) 英国領事館は、この昭和15年(1940)に函館市が2万5千円で購入しており、歌人の土井多紀子さんによれば、外務省に勤務していた与謝野晶子の息子が仲介してくれたとのことである。
- また、旧英国領事館門章が市立函館図書館に所蔵されている。これは、昭和15年(1940)8月8日に横浜の総領事から函館市に贈られたことになっているが、実際はその4日後にデンビーの手によって函館図書館へ贈られたものである。
- (29) 都筑忠春氏は、「紳士録」によると伊予西条藩の末裔で現在74才である。元男爵で正金銀行に入行後、陸軍に入り、戦後中央製作所の社長を歴任している人で、鎌倉に父が日露戦争の折りの御下賜で建てた「放情閣」(伊藤博文命名・明治40年落成)という西洋館の大邸宅を構えていた。
- (30) 嘉禄元年(1225)北条政子が源頼朝の菩提を弔うため建立した長楽寺が、この年政子が死去したので政子の墓もある香華寺となり、現在安養院となった。
- (安養院縁起)
- 異宗の埋葬を許可したことについて、住職鳥居良禅氏は、「終戦後西洋人を受け入れる風潮にあり、特に断わる理由もなかった。」という。
- 昭和27年4月1日には、改葬者の3名は亡くなっていないので、書類上便宜的に記載したのか。
- (31) 改葬関係書類
- (32) 久保田泰弘氏(横浜在住)には、函館博物館へのデンビー一族の資料寄贈に際し、プレーゾ氏の友人として多大な協力をいただいた。

〈デンビー一族の消息〉

デンビー一族で、現在まで判っていることを述べてみたい。

初代デンビーの妻でA・デンビーの母であるアンナ・デンビー⁽¹⁾について、プレーズ氏は「ミス・ジョージ・デンビーは、日本の長崎の貴族の娘、在英日本大使の娘である。」といていた。⁽²⁾ また、沢井誠治氏は「長崎から出稼ぎにきていた女工の中に森高という非常に頭が良く、容姿が端麗な女性があり、デンビーに望まれて結婚した。」⁽³⁾

「樺太史談」⁽⁴⁾によると、「森高ミツ」または「光」とし、長崎のナヤサンの所で働いていたが、初代デンビーと結ばれたとある。一方、レイン・アーンズ氏は、「妻のアンナは、突然脳卒中で倒れ、長崎南山手25番地の自邸にて死亡。行年44才（ママ）・・・アンナは新坂本国際墓地に埋葬された。」⁽⁵⁾ としている。

森高家は、アンナ・デンビーの実家に当り、弟の森高伊助の家系である。伊助とタカの間には傳が生まれ、傳とミエの間に4人の娘がある。今回、当主である2女の森高千代子氏と長女の浜田昌子氏からご教示をいただいた。過去帖によると、俗名を森高テシ⁽⁶⁾といい、明治42年（1909）12月に57才で亡くなっている。

この墓碑（前掲）では、54才で亡くなっており、過去帖の間に3才の差がある。

森高テシは、函館より早くから外国人と接する機会の多かった長崎の出身で、勤勉で初代デンビーをよく助けたようである。そして、長崎の土に還った。

初代デンビーの二男で、A・デンビーの弟のテーリー・デンビーは、アメリカに住んでいた。テット・デンビーとも呼ばれ、日本語ができなかったといわれる。⁽⁷⁾

初代デンビーの三男で、A・デンビーの弟のワシントン・デンビーもアメリカに住んでいた。通称、アメリカ・デンビーといい、日本語を良く話したといわれる。⁽⁸⁾

初代デンビーの4番目の子は、子女で名前はエリザベス・デンビーで愛称をリサといい、明治19年（1886）3月に生まれ、大正3年（1914）函館の英国領事館副領事エドワード・ゴートンと結婚、その年の暮れ、ゴートンのハワイ英国領事に就任によってホノルルへ行った。しかし、大正8年男の子を出産した9日後の4月21日に急性虫垂炎のためカウイケオラニ小児病院で32才で死去している。

ゴートン夫人はテニスがうまく、ホノルルの社交界では、人気者であつたらしく、その

日一日テニスを行わなかったといわれる。

リサの遺体は火葬にふされ、10月21日長崎の両親の傍らに埋葬した。⁽⁹⁾ 墓碑には、

L I S A
 ONLY DAUGHTER OF
 G. P. DENBIGH
 AND
 DEARLY BE LOVED WIFE OF
 E. L. S GORDOON 14465
 HONOLULU APRLE 1919

と刻まれている。

初代デンビーの四男で、同じくA・デンビーの弟のイワン・ジョン・デンビー⁽¹⁰⁾は、墓碑によると明治21年(1880)生まれであるが、歿年が不明で、A・デンビーより後に亡くなった。函館に住み、英国によく出掛け、日本語ができた。⁽¹¹⁾ 夫人は、A・デンビーの妻マリアのアンナである。後のプレーズ氏夫人である。⁽¹²⁾

彼は、戦後横浜に住んでいたが、猟銃の暴発で事故死したといわれる。

A・デンビーの妻マリア・イワノブナ・デンビー⁽¹³⁾は、明治29年(1896)8月20日生まれで、大正9年(1920)8月、函館ハリストス正教会で結婚している。ロシアの女優であったという。⁽¹⁴⁾ 趣味は、音楽であった。⁽¹⁵⁾

横浜外人墓地の墓碑に、

I N L O V I N G M E M O R Y
 O F
 M A R I A D E N B I G H
 B O R N 2 0 A U G U S T 1 8 9 6
 D I E D 1 8 O C T O B E R 1 9 6 7
 R E S T I N P E A C E
 M Y D E A R E S T S I S T E R

と刻まれている。

A・デンビーが亡くなった後、A・デンビーの友人の軽井沢の別荘に住み余生を過ごしたが、¹⁶ 昭和42年（1967）10月18日に亡くなっている。墓は当初軽井沢にあったが、現在横浜外国人墓地に移され、A・デンビーと母マリア・クルスカヤ・イワン・ジョン・デンビーとともに葬られている。

A・デンビーの妻マリアの妹のアンナ・イワノブナ・パトリーナ・プレーゾは¹⁷ 明治31年（1898）2月16日ロシアのサマラ市に生まれ、昭和63年（1988）2月2日、横浜で没した。¹⁸ 姉より先にイワン・ジョン・デンビーと結婚、彼との間にミス・ユーズミラ・リポウェッカヤがいる。¹⁹

昭和41年（1966）4月25日プレーゾ氏と結婚した。²⁰ マリアの亡くなった後軽井沢の別荘に住み、²¹ 東京ニコライ堂にも顔を出すこともあったようである。²²

墓は横浜外人墓地にあり、プレーゾ氏とともに眠っている。

マリアとアンナの肖像を見るとまるで姉妹でないような感じがした。よって、今回の調査の中で話を聞く機会があった。「マリアさんとアンナさんは、顔立ち・性格が異なり、姉妹ではないように見受けられた。妹のほうが姉のようであった。そして姉のほうが妹に何でもやってもらっていた。料理もニーナさんが作っていた。」という話と、「マリアさんとアンナさんは姉妹ではないのではないかと思う。アンナさんはしっかり者で、ニーナさんはだらしがなかった。」という正反対の答えが戻ってきた。

ミス・ユーズミラ・リポウェッカヤ²³ は、アンナの前の夫との間の娘である。大正3年（1914）8月28日、ウラジオストックで生まれ、昭和14年（1939）6月13日に中国の上海で死去した。

第2次世界大戦の際、上海でピストルで殺された。それをわざわざ荒木大将の口利きで、遺体を函館に運び函館の外人墓地に葬った。日本軍のため諜報員として働いていたようである。ミキとも呼んでいた。²⁴

「函館外人墓地」²⁵ によると、『ルドミーラ・チェリー夫人は昭和14年6月18日上海にて銃殺される。7月8日遺骨をここに埋葬す。（函館ハリストスのメドリカ）因みにチェリー夫人はバトゥリンの妻アンナの前夫の娘由。』とあり、日付は合わないが、結婚してチェリー夫人となって短い人生を閉じた。

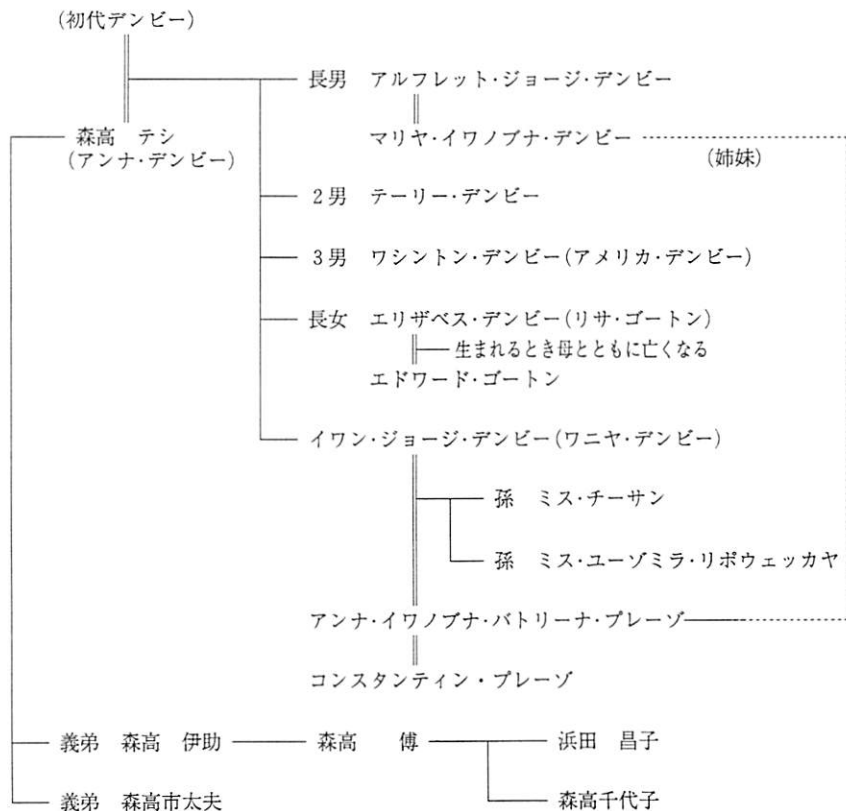
よく判らないのが、ミス・チャーサンで、ブレーゾ氏の説明では、イワン・ジョン・デンビーの娘で、アンナの姪であるという。とすると、彼等が夫婦でなかったのか、A・デンビーの別の兄弟の子供かとも考えられるが、詮索も今後に譲りたい。現在英国にいるという。²⁷⁾ここでは、一応同一人物ではない考え、義姉妹とした。

森高テシの弟の伊助は、デンビー商会幹部として活躍した人だが、明治元年（1868）に生まれ、昭和21年（1946）3月8日に亡くなっている。²⁸⁾妻タカとの間に傳がいる。

函館市谷地頭のデンビー邸宅の土地は、森高伊助名義になっていた。

初代デンビーの妹や娘のエリザベスと同じ頃死亡したといわれる彼女の男の子、それからマリアとアンナの母親マリア・クルスカヤ²⁹⁾の件などについては、現在詳細が判らない。

デンビー一族系図



[註]

- (1) 墓碑は「ANNA」
- (2) 「Mrs, GEORGE DENBIGH」
- (3) 「カムサッカ漁業の回顧（1）」沢井誠治著（海峡113号）海峡評論社
昭和41年 1966.5
- (4) 「樺太史談〈真岡物語〉」小野隼・西村政雄編 北斗社 昭和49年
- (5) 「時の流れを超えて—長崎国際墓地に眠る人々—」レイン・アーンズ, ブライアン・パークガニ共著
- (6) 戒名「操善院徳室妙大姉」
- (7) 土井多紀子氏談（1982.5）
「カムサッカ漁業の回顧（1）」沢井誠治著（海峡113号）海峡評論社
昭和41年4月 1966.5
- (8) 三島義堅氏談
「カムサッカの漁業の回顧（1）」沢井誠治著（海峡113号）海峡評論社
昭和41年5月 1966.5
- (9) 「時の流れを超えて—長崎国際墓地に眠る人々—」レイン・アーンズ, ブライアン・パークガニ共著
- (10) ワニヤ・デンビーともいわれる。
墓碑は「JOHN, G, DENBIGH」
- (11) 三島義堅氏談
土井多紀子氏談（1982.5）
- (12) 森高家ほかからのご教示
- (13) MARIA IVANOVNA DENBIGH マリーとも呼んでいたらしい。
- (14) 「カムサッカ漁業の回顧（1）」沢井誠治著（海峡113号）海峡評論社
昭和41年5月 1966.5
- (15) プレーゾ氏談
- (16) 久保田泰弘氏談
- (17) ANNA IVANOVNA (BATOLINA) PLEZO
- (18) プレーゾ氏談
- (19) 何人かの方のお話であるが、プレーゾ氏は詳しいことを話してくれなかった。
- (20) プレーゾ氏談
- (21) 久保田泰弘氏談
- (22) 馬場脩氏談（1978.9）
- (23) Miss, LUDMILA LIPOVETSKAYA
- (24) プレーゾ氏メモ

- (25) 久保田泰弘氏談
 (26) 「函館外人墓地」馬場脩著 図書裡会 昭和50年
 (27) SHVETS氏談
 (28) 森高千代子氏のご教示によると、森高伊助は後妻の子で市太夫という弟がいた。
 (29) MARIA KRUPSKAYA 1892.12.4~1952.6.25
 『墓は当初函館のロシア人墓地にあった。』（佐藤栄子氏談）とすれば、そこから安養院に改葬され、現在横浜外国人墓地に埋葬された。
 殆どマリアとともに過ごしていたろう。

〈おわりに〉

このたび、デンビー関係資料の受け入れに伴う調査をすすめてきたが、今までデンビー一族については総合的に研究が為されておらず、また、資料が乏しいことに気が付いた。特に、今田正美氏は『デンビー商会の場合は、外国人の個人企業なので、中枢にあった人達は故人となり、継続した資料は全然なく、僅か傍証的記録を訪ねて推定を試み、かつての職員で古老となった人達の記憶による外ない。』⁽¹⁾といわれているが、これを実感した。

プレーゾ氏の友人で市立函館博物館にデンビー一族の資料を寄贈するとき、後見役としてお世話いただいた久保田康弘氏によると、『A・デンビーがなくなった際、遺品などの処理に立ち会ったが、その際日記や写真など全て焼却した。非常に几帳面な人で綺麗に詳しく書かれていた。』とのことであるが、それらが残っていればと返す返すも残念なことである。

また、デンビー一族を追いかけて行く内に、遠く故郷を離れ、苦勞の末、財を成した初代デンビーの一生、そして日本人を母としたA・デンビーを頭とする5人の子供たち、その妻や関係者のドラマチックな生涯を知ることができた。

しかし、何か不透明な部分が多い。これらの原因の一つとして、外国人に対する日本または日本人の閉鎖性・差別などが大きな原因ではなかろうか。北洋漁業の覇権を争うデンビー一族の公的な顔と、私的関係の裏の顔があり、聞き取りなどの調査の中で、デンビー一族を異なった見方をしていることがあった。

なお、大正2年(1913)4月28日に函館ノルウェー領事館をデンビー商会内に設置した経過を知る資料がないかとノルウェー王国大使館にもお世話をかけたが、良く判らないと

のことで、ノルウェー外務省を紹介されたが、以後そのままになっている。

また、イギリス大使館も同様に、そのころの資料は無かった。

ウラジオストックも未調査でA. ЛИНОВ氏と連絡を取ろうとしているが、掴めない状態にある。

函館や他市にデンビーのことに詳しい方々が多く居られ、住所などお聞きしているが、時間の関係で何うができなかった。反面、原稿用紙の枚数も制限されているため、お聞きしながら取り上げなかった事項もあり、これらについては、次回に譲りたい。

このように多くの未調査を残しての報告であるが、調査の階段を一步昇ったところである。なお、本稿の不備を補うためにも、デンビー一族に関する情報を、どのような僅かなことでも、お教え願いたい。

今後も、本原稿のご批判を仰ぎながら、継続して追跡調査を押し進めて行こうと考えている。

最後になったが、いろいろとご教示くださった方々に、厚くお礼を申し上げます。

[註]

- (1) 「カムチャツカ夜話（その1）〈デンビー商会のこと〉」今田正美著
（海峡135号）海峡評論社 昭和45年1月

（市立函館博物館学芸係長）



A・デンビー肖像



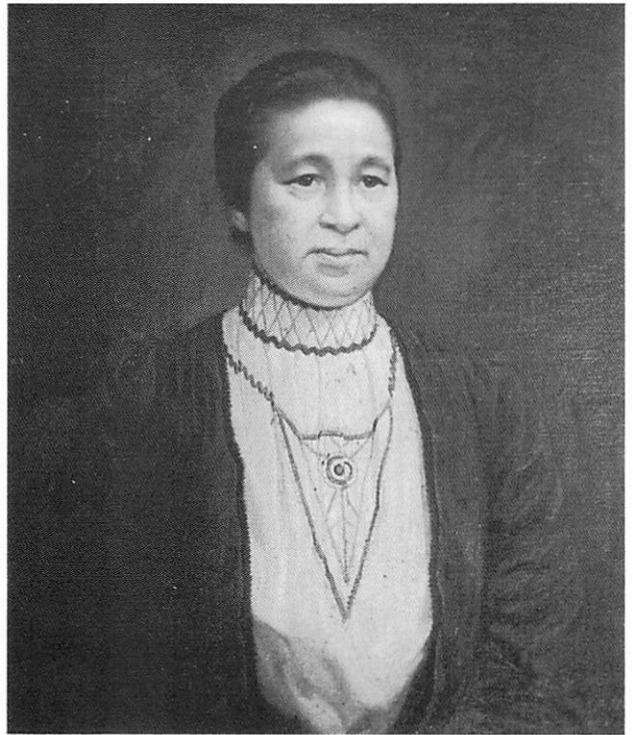
マリヤ・イワノブナ・デンビー肖像



アンナ・イワノブナ・
パトリーナ・グレイズ肖像



エリザベス・デンビー肖像



アンナ・デンビー肖像 (森高テシ)



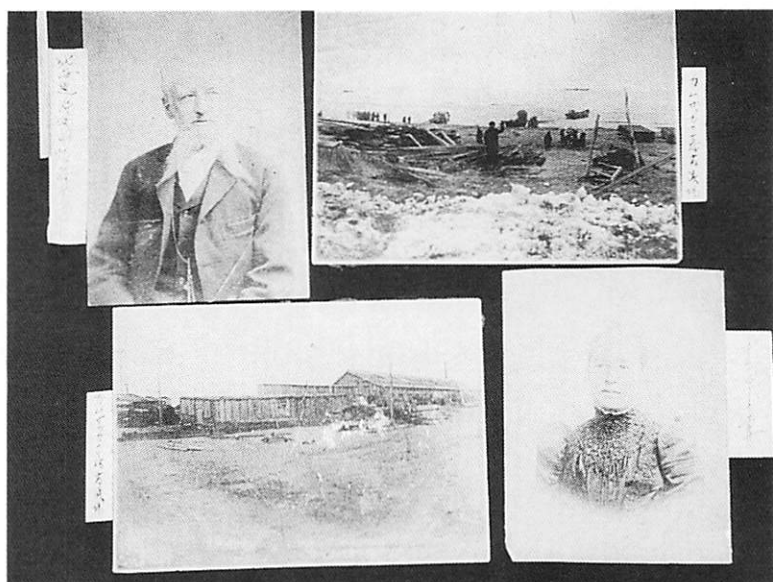
ミス・ユーズミラ・
リボウェッカヤ肖像



ミス・チーサン肖像



新坂本国際墓地の
デンビー家の墓



初代デンビー 初代デンビー夫人



ウラジオストックのデンビー商会の建物
清水恵氏提供



長崎にあったデンビー邸
(博物館 明治村提供)



デンビー一族 前列右から 初代デンビー 森高テシ
テーリー後列右から A・デンビー エリザベス(リサ)
イワン・ジョン ワシントン



横浜外国人墓地のA・デンビーの墓



晩年デンビーの住んで
いた都筑邸(放情閣)
華族の商法荒間蒼海著
都筑忠春氏提供



イワン・ジョン・デンビー

館蔵貝類標本について

—市立函館博物館所蔵の貝類標本「高川コレクション」を中心に—

尾崎 渉

<はじめに>

市立函館博物館には現在、考古・歴史・民俗等、数多くの資料が収蔵されており、どちらかと言えば人文系の資料が中心の博物館と考えられがちである。しかし、自然科学資料も地質鉱物・昆虫・植物・動物と幅広い分野で豊富に収蔵しており、これらの中には学術的にも、また我が国の自然科学史上においても極めて貴重と言える資料が含まれている。

これらの自然科学資料は、現在の市立函館博物館の前身で、明治12年（1879）5月25日に開館した北海道開拓使函館支庁仮博物場から今日に至るまでの間に収集されたもので、この間、資料の管轄、収蔵場所の変更など幾多の変遷をたどってきた。資料目録も仮のものより作成されておらず、昭和41年に市立函館博物館本館が完成してもなお、まさに手付かずの状態のまま眠っていたのである。

開館100周年を迎えた昭和54年、記念事業の一つとして、待望の「市立函館博物館蔵品目録」を人文系から年次計画で刊行することとなり、自然科学資料については、昭和57年から作業がスタート、今年度までに地質鉱物、動物と刊行されてきた。さらに現在は、残る植物標本についても整理作業を進めている状況である。

地質鉱物標本から始まり貝類、魚類、昆虫などを含めた動物標本までを整理する中で、その数量の多さとともに、〈数々の学術的価値の高い資料を、実際に自分の手にとって見る〉ということのほか、〈多くの専門家の方々からアドバイスを得る〉という貴重な経験をすることができた。とりわけ貝類標本では、昭和44年に寄贈を受けた「北の海の貝コレクション」の集大成ともいべき『高川コレクション』を整理した時、その種類の豊富さと、一頭、一頭の持つ学術的価値の高さ＝個体の正確な記録についてもさることながら、その標本の持つ美しさに魅せられてしまうものを感じた。

このコレクションを収集した高川金次氏は、もともとは貝類の専門家を志したわけではない。たまたま仕事として北洋に出漁するトロール船の通信士をしているとき、漁網について上がってくる貝殻を何気無く見ているうちに興味を持ち、収集を始め、今では北の貝をはじめとする我が国を代表する貝類研究者の第一人者となったのである。特に氏が収集

を始めた頃は北の貝に対する調査研究がさほど進んでいないときでもあり、さらに氏の収集した標本の記録が正確なことから、まさに北の貝における基礎を築いたと言っても過言ではない。

氏から、様々なお話しを聞かされるたびに、氏の貝に対する情熱と深い思い入れがうかがわれた。

このようなことから、今回、数多い自然科学資料のうち、館蔵貝類標本の高川コレクションを中心に紹介していきたい。

〈函館博物館最初の貝類標本〉

函館博物館の前身である開拓使函館支庁仮博物場は、明治12年5月25日に開場したが、その中に展示された資料は、開拓使函館支庁が広く一般に広告して収集した「異獣殊魚其他動植物ノ珍奇ナルモノ・・・(後略)」⁽¹⁾の他、当時函館に縁のある外国人から寄贈を受けた資料が主であり、珍しい動物、植物など自然科学資料が中心であった。トーマス・W・ブラキストンの仮剥製標本などはその中で特に知られているが、貝類標本では、アメリカ人で東京大学初代理学部教授であったエドワード・S・モースの標本が寄贈され展示されているのである。

大森貝塚の発見者として有名であるエドワード・S・モースは、明治10年(1877)に腕足類研究のために来日、江の島で漁師の家の一室を借り、そこを拠点に我が国での腕足類研究をしばらく行っていたが、その後東京大学から招聘され、2年間動物学の教授を勤めることとなる。⁽²⁾この間、彼は全国各地を調査旅行し、各地で標本採集をしているが、明治11年7月16日から約1ヶ月間来道した折、函館にも立ち寄り、竣工したばかりの開拓使函館支庁仮博物場を訪れている。⁽³⁾

この後、モースは、採集した貝類を開拓使の依頼により博物場に寄贈、開場時からこの貝類標本は展示されていたが、それについては、明治14年の「開拓使事業報告 乾 函館支庁」の中に「函館支廳管下函館仮博物場 北海貝類」と記載されたものがあり、モースの寄贈した貝類の種名が明らかになっている。⁽⁴⁾70種ほどが記載されているが、現在とは違う学名となっており、「市立函館博物館蔵品目録5 動物篇I」をまとめる際に、函館在住の日本貝類学会会員である五十嵐重雄氏、北海道大学水産学部海水増殖学講座助手五嶋聖治氏らの協力により、ある程度は判読できたが、正確な種名を明らかにすることはできなかった。

この「函館支廳管下函館仮博物場 北海貝類」を現在の学名に当てはめていけば、腹足綱30種、斧足綱30種、不明が7種である。途中3ヶ所に「以上ラメリブロンチス」、「以上

ガステルヲポツプ」, 「以上アナノラムス」とあるのは, 明らかにこの表に記載されている標本の分類を示したもので, 「以上ラメリブロンチス」は LAMELLBRANCHI 二枚貝(斧足綱)を, 「以上ガステルヲポツプ」は GASTROPODA 巻貝(腹足綱)となると思われる。最後の「以上アナノラムス」には, 判読できないものが多く, 腹足綱と斧足綱が混じって記載されているようである。

このことから, モースの寄贈した貝類は, 正確には67種であり, 当時の博物場関係書類に70種70個となっている⁽⁵⁾のは, 単純に一覧表を数えただけで, 正確な種数, 点数ではないことが推察される。

点数についても, 当館に保存されている明治24年に開場した水産陳列場(函館博物場第三館)列品目録⁽⁶⁾には, 「貝殻類 第一館」の部に「貝類函入 種245 モーリス寄贈」と記載されたものがあり, これはモースが寄贈した貝類標本を挿していると思われ, 数量が245である点に注目したい。点数にかなりの差があり, どちらが正しい点数であるか不明であるが, いずれにしても, 70個という点数には疑問がある。

〈現在のモース標本〉

さて, このモース寄贈貝類標本であるが, 残念ながら現在では, 当館でモース標本と断定できる標本を見ることはできない。

これは, 明治15年に開拓使廃止, 函館県が設置され, 仮博物場が函館県博物場となった以後に幾多の所管変更があり, これが大きく影響したと言えよう。とくに水産陳列場開場後のめまぐるしい所管変更では, 博物資料も移動をおこなったようであり, 明治32年に開校した市立函館商業学校には, 物品とともに一部資料が運び出されたようである。⁽⁷⁾

モースの貝類とともに, 仮博物場に展示されていたブラキストン採集の鳥類標本は, 明治41年には北海道大学農学部附属博物館に集められているのもそのひとつの例である。

しかし, モースの貝類については, 函館から移動したことは以下の資料により考えられないことである。それは, 前記したモース寄贈の貝類が記載されている水産陳列場列品目録が, 明治11年~大正11年までの列品目録となっており, また, 市立函館図書館に残っている昭和5年6月に同館で開催した貝類展覧会の関係書類⁽⁸⁾の中に, 「モース先生蒐集函館附属近貝類目録; 函館水産陳列場所蔵」があり, 41種の貝類が記載されている。

このことから, 昭和5年まではモースの貝類標本が水産陳列場に残っていたことが裏づけられる。その後水産陳列場の資料は, 昭和18年に市立函館図書館に引き継がれてさらに, そのまま, 現在の市立函館博物館に引き継がれていると言える。しかし, 動物目録発行の際に, 当館にある旧蔵標本をすべて整理しても, モースの貝類と特定できる形で標本は残っ

ていなかった。これは、前述した所管変更時の明確な引き継ぎ書類、資料移動関係書類がない点が、モースの貝類コレクションとして、そのままに現在まで残せなかった大きな要因ではないだろうか。

旧蔵標本の整理作業を始めた時、標本ラベルと実際の標本がまったく異なって収蔵されており、せっかく水産陳列場時代のラベルが残っていたにもかかわらず、モースの貝と特定するには至らないモノばかりであった。ただ、2点ほど水産陳列場時代のラベルとともに残されていた標本があり、これは、モースの貝類標本に何らかの関係があると推測できるものである。この標本は、腹足綱有肺亜綱基眼目オナジマイマイ科に属しているヒダリマキマイマイとミスジマイマイで、残されていたラベルには、「*Helix quasita* Feiussae」と「*Helix peliomphala* Pfi」と記されており、現在の学名と属名の部分が異なっているが、間違いなく同じ紙製の標本箱に入っていた標本をさしたラベルである。

前記した「函館支廳管下函館仮博物場 北海貝類」の表に「ヘリキス」と記載されている部分があるが、これを学名にあてはめて解釈すれば、「*Helix*」となり、やはりオナジマイマイ科の標本をさしているのではないだろうか。このように解釈すれば、残されていたこの標本がモースのものとして理解できる。ただ、ここで疑問が残るのは、モースが寄贈した標本は、あくまで明治11年に来道した時に採集した貝類であるのに、この2種は、北海道には分布していない種であり、さらにラベルの採集地と思われる部分に「Tokyo」と記載されている点、また、モースの表には、種名までは明記されておらず、「ヘリキス」と属名と思われるところだけ書かれているにもかかわらず、水産陳列場のラベルには種名が明記されている点などである。モースが北海道内で採集した貝だけを寄贈したとすれば、この「ヘリキス」と書かれた貝類はおそらく、エゾマイマイ *Ezohelix gainesi* PILSBLYであると想像され、ヒダリマキマイマイとミスジマイマイとは違う種ということになる。

しかし、この東京で採集されたマイマイが、モース以後に寄贈されたというはっきりとした記録も残っていないため、何らかの形でモースと関わりがあると想像しても良いのではないだろうか。モースは、北海道内で採集した標本を一度東京に持ち帰り、分類整理後の翌年に寄贈しているが、⁽⁹⁾ このことは、あくまで想像の域を出ないが、自分の手持ちの標本、たとえば、東京周辺で採集した貝類などを含めて寄贈していることも有り得るのではないだろうか。

このようなことから、現在、モース標本を当館で見ることができない。しかし、モースは、大森貝塚の発見者として知られること、また、彼が東京大学で講義した動物学の最初のクラスにいた岩川友太郎が、後に多くの論文を発表し、我が国の貝類学研究の基礎を築

いていることは、モースが日本の貝類学発展に大きく貢献した人物であると言える。このモースの標本の一部が、いち早く函館博物館の前身である開拓使函館支庁仮博物場に寄贈展示されていたことは、現在までの長い時間の中で、貴重な自然科学資料、後に後述する高川コレクションなどの貝類標本が収蔵されてくる土壌となったということが言えるであろう。

〈モース以外の旧蔵標本〉

モース標本以外にも、当館の長い歴史の中で多くの貝類標本が寄贈となっている。この中の多くは、地元の標本が多数を占めており、中には明治21年(1888)寄贈となったマダカアワビは、現在の個体に比較してかなり大きく、当時の貝類生態状況がよく分かる標本となっている。⁽¹⁰⁾

旧蔵標本の中で注目されるものは、モース以後に岩川友太郎とともに我が国貝類学の発展に早くから貢献した平瀬与一郎の標本である。

平瀬与一郎は、安政6年(1859)に兵庫県に生まれ、明治20年に京都へ移住した。京都に移ってから、貝類研究を自分の生涯の研究であると考え、以後全国の貝類を採集し数多くの新種を発見している。世界の研究者と標本の交換を行い、彼の自宅には様々な標本が収蔵されていた。これら標本を広く公開すべく、我が国最初の貝類専門誌「介類雑誌」を明治40年に発行、さらに、独自で私設貝類博物館というべき「平瀬貝類館」を大正2年に京都に開館している。⁽¹¹⁾しかし、やはり私財を投じての開館であったため、6年後の大正8年には惜しくも閉館された。ここに展示されていた標本について、船水清著「岩川友太郎伝」(岩川友太郎伝刊行会 1983)に、「その収蔵標本を帝室博物館およびワシントンの米国立博物館に分割して寄贈し、残部は函館図書館標本室に保存された。」と記されている。この函館図書館標本室に置かれた平瀬与一郎標本が、前述したように、後に函館博物館に引き継がれているのは間違いないが、標本名、採集地、採集者、寄贈者を記した引き継ぎ書類は残されておらず、この標本もモースの標本と同様に特定することはできなかった。これは誠に残念なことである。

しかし、現在残っている旧蔵標本の中には、南の貝類が多数含まれている。おそらくこれらが平瀬標本ではないかと推測され、今後さらに当時の文書類を調査していくことであきらかにされるのではないと思われる。

いずれにしても、貝類研究者から我が国の貝類学研究に多大なる貢献をした人物として挙げられているのはモース、岩川友太郎、平瀬与一郎の3人であるが、この中から2人の標本が当館に残されていることはまさに驚くべき事実である。資料整理が終了した現在、

これらの残されている旧蔵標本について調査を進め、我が国貝類学の基礎を築いた人物の標本を少しでも明らかにしていく必要があるだろう。

〈市立函館博物館時代の標本〉

昭和23年、それまで市立函館図書館の付施設であった水産館（仮博物場）、先住民族館（第二館）が市立函館博物館となった。博物資料もそのまま引き継いで収蔵、展示されていた。昭和25年、函館市民による博物館建設運動によって函館公園内に市立函館博物館の建設が始まるが、完成までの約20年間に幾多の紆余曲折があり、昭和29年の北洋再開記念北海道大博覧会開催で、開場のひとつとなった五稜郭公園内の施設を五稜郭分館として改修、昭和30年6月30日に開館している。この五稜郭分館は、立地条件から箱館戦争関係資料が中心であったが、自然科学関係資料もあわせて収蔵展示され、小学生向けの「科学教室」が普及事業として新たに開催され始めた。その後昭和40年に入り、本館の完成が近づいたため、分館の展示がさらに明確に示され、「海の生物に見られる動物の進化と生態が解明できるような系統的陳列」⁽¹²⁾を基本計画とし、貝類標本をすべて分館に移動している。しかし、昭和43年に起きた十勝沖地震で、分館の展示資料に大きな被害を受け、復旧作業の後、大幅な展示替えによって自然科学資料関係は、すべて撤去された。この時期は、貝類標本については、函館周辺の貝類が入ってくる程度で、大きなコレクション類の新たな収蔵はない時期ではあったが、昭和23年から当館に勤務した石川政治が採集した貝類標本が際だっている。

石川政治は、現在の北海道大学水産学部の前身である函館高等水産専門学校養殖科の出身で、貝類研究を専門としていた。日本貝類学会評議委員でもある石川は、昭和44年から市立函館博物館3代目の館長となっても実践派の館長として、精力的に函館近郊の貝類分布について調査活動を行い、東京大学海洋研究所の研究船淡青丸に乗船しての北海道厚岸沖の貝類調査、青森県陸奥湾の調査などによって採集された標本を残している。さらに、貝類学会評議委員であることから、国立科学博物館はじめ、各地の貝類研究施設や研究者と交流もあり、函館周辺では得られない貴重な標本をも交換・収集している。

石川は、昭和52年に退職したが、このような在職中の活動は、函館博物館が創世期から貝類標本を収蔵・展示していたことによるところが大きく、数多くの貴重標本を当館が収集することができ、なかでも後述する当館貝類標本の中でも学術的価値の高い高川コレクションが寄贈されたことは、まさに氏の当館における大きな業績だと言えるだろう。

〈高川コレクション〉

当館に収蔵されている北の貝類の集大成というべき「高川コレクション」を寄贈した高

川金次氏は、昭和7年石川県河北郡内灘町に生まれ、若くして函館に移り漁船の甲板員の仕事をしていたが、将来性のある通信士を勧められ、すぐにこの資格を取得すべく、当時の札幌高等電波学校に入学、同校の一期生として卒業、折りから再開された北洋漁業鮭流し網船の通信士として勤務することとなる。この北洋での操業中、2回遭難したが、たまたま救助された船に縁あって昭和35年から乗ることとなった。この船が沿海州方面で操業中、漁網についてくるホタテガイとアラスカニシキガイの差異について興味をもち、仕事の傍らこれらの貝類について調べ始めたのが貝類標本を収集するきっかけとなったのである。その後ベーリング海方面に転進、当時貝類研究者の間でも知られていなかったワダツミウリガイ、メロンボラ、タテゴトナシボラ、ホクトボラなどを採集、このことにより昭和38年頃、日本貝類学会に入会していた関係もあって一躍氏の名前が関係者の間で知られるようになった。北の海を回る漁船での仕事という貝類研究者から見ればじつに恵まれた立場にあったとは言え、数々の貴重な貝類を採集したことは、氏の北の貝類に対するなみならぬ愛情と地道な努力の賜物であるだろう。

氏は採集した標本を、函館の自宅に持ち帰り保管していた。しかし、昭和44年、氏は自宅の新築工事により標本を移動する必要に迫られ、さらに、以前から「この標本を公共的な機関に寄贈し広く公開してもらえたら」¹³⁾と考えていたこともあり、また、当時の函館博物館館長石川政治が日本貝類学会評議委員であることも知り、昭和44年初めて当館を訪れた。昭和44年8月7日付北海道新聞の記事によれば、「学者が数十万円の費用をかけてドレッジ（しゅんせつ）しても、とれるのは百個くらいだ。高川さんは立場に恵まれていたとはいえ、何十年分の仕事を十年間でやったことになる。文献だけで日本には標本のないような貝がいくらかもあるので驚いてしまった。現在博物館にある北洋の貝は数十種だが、これで国立科学博物館をしのぐコレクションとなりそう。……（後略）」と当時のことが書かれており、石川がどのような気持ちでこのコレクションに接したかが良くわかる。石川が貝類の専門家であることと、「寄贈して欲しい」という熱意から、高川氏はすぐにコレクションの寄贈をその場で決め、こうして氏のコレクションが当館に収蔵されることとなったのである。

〈高川コレクションが与えた影響〉

氏が収集し始めた昭和30～40年代は、我が国においては南洋海産貝類の調査研究が主流であり、北洋海産貝類については一部の研究者だけが行っていただけであった。これは、どうしても研究者の目が、暖流系に分布する貝類の見た目の美しさに引かれることに加え、寒流系の貝類調査では、磯採集によって得られる標本に限りがあり、船によるドレッジ調

査に頼らざるお得なく、そのためには莫大な費用がかかることによるものであると考えられる。また、過去においても、前述したモースはじめ、外国船が開港地である函館を訪れる際に必ず行う水路調査によって、貝類標本も採集しているが、これらのほとんどは本国に送られており、我が国にデータとして残っているものは稀である。

このようなことから、北洋海産貝類を取り上げた図鑑類も数少なく、研究者がいくら北の貝類を研究しようとしても、採集した標本が図鑑や文献にも記載されていないものが多いため、同定、分類すらできなかったのが実情であった。そのため、北の貝類を扱った図鑑類の出版が要望され、国立科学博物館の波部忠重氏によって、保育社から昭和40年に「原色世界貝類図鑑（1）北太平洋編」が出版された。この図鑑は、多くの研究者にとって北の貝類を紹介したものとして喜ばれ、研究の大きな手助けとなった。しかし、入手できる標本に限りがあり、完全なものとは至らなかった。

こうした北の貝類をめぐる現状が続く中で、それまでの実情を一変させるコレクションが出現した。高川コレクションがまさにそれである。

高川コレクションには、それまで発表されていない種類の新種、発表されていても実際の標本が数少ない種類、一例としてエゾバイ科のフクレエゾバイ、ワダチバイなどの標本が多数含まれていた。氏は、採集したこれらの標本の中から希小標本と思われるものを国立科学博物館、日本貝類学会などに送付しており、これらが研究され発表されることによって得られたものが、北洋海産貝類の研究をさらに急速に進める結果となったのである。この時期、波部忠重氏など著名な貝類学者が、氏の標本をもとに新種を発表し、氏の採集した標本であることに敬意を表して、タカガワバイと命名していることもその表れであろう。

(14)

また、従来寒流系の貝類に対し、暖流系に比較して色彩が乏しく、いわば地味な貝が多いという概念があった。これは、前記のとおり標本が入手しにくいことによるものであったが、高川コレクションの出現により、北の貝類にもオホーツクイトカケガイ、オーロラニシキガイなどのように、確かに南の貝類に比べ派手な色彩はないにしろ、実に美しい色彩をもつ貝が存在することを目の当りにすることとなったのである。

高川コレクションが世に出た後、北の貝類に対する研究者らの認識も大きく変化した。新種が発見され分類がかわり現在では北洋海産貝類の分類は、ほぼ完成されている。このことは、氏の採集した標本によるところが大きいと言えよう。図鑑類も、氏の採集した標本を使い、北の貝類を解説したものが多数出版されるようになってきており、氏の標本が、北の貝類研究に絶大なる影響を与えたと言っても過言ではないだろう。

〈高川コレクションの評価〉

前述のように、北の貝類研究に大きな影響を与えた高川コレクションであるが、これは氏の収集した標本すべて、採集年月日、採取場所、採集者が整理され、明記されていることによるものである。自然科学の標本すべてに言えることであるが、いくら希少標本であっても、採集年月日、採集場所などが明らかでないものは、標本の学術的価値がないに等しい。この点、氏の標本は、完全に明記されており、さらに正確なまでに採集時の状況が記録されているものも多く、学術的に極めて価値の高い標本となっているのが、氏の標本の特徴であり、また、大きな評価につながっている。

さらに標本が完全な形で作られている点が上げられる。同じ個体でも丹念に収集したことが裏づけられるように、巻貝では螺層などが破損しているものが少なく、また、標本の分類に必要な蓋が必ずついているのである。近年、貝類標本の評価に国際基準が設けられてきたが、氏の収集した標本は、まさにこの基準の中でジュム（特級）クラスに属するものが多く、模式標本として保存されている場合がひじょうに多い。

また、北の海産貝類をほとんど網羅するだけの種類の豊富さもさることながら、これらの中で、現在では採集困難な貝類が多数含まれている。氏が採集を始めた昭和30年代は、鮭鱒漁船が旧ソ連領付近や、ベーリング海、オホーツク海など、規制はあったものの、今より比較的自由に操業できた時期であり、それによって様々な種類の貝類も採集できた時期であった。しかし、その後昭和40年代から始まった200海里漁業専管水域、領海法などによって、次第に漁場がせばめられ、現在では周知のとおり北洋漁業も終焉を向かえつつある。このような状況下では、氏のような採集を現在おこなうことはまず不可能であり、今後、北洋の貝類採集はかなりの困難を伴うであろうことが予想される。仮に氏が、早い時期に収集活動をおこなっていなかったと仮定すれば、北洋海産貝類の研究がかなりのペースダウンになっていたのではないだろうか。1年の大半を海上で暮らし、その仕事内容が貝類採集に好都合であったという立場、そして採集活動をおこなう上で、時期的にも恵まれていたことによって、このコレクションが完成したとは言え、氏の標本採集に対する地道な努力、研究心があったからこそ、高い評価を得るものとなったのである。最近北海道内はじめ、本州の博物館関係から氏の最近収集した標本を収蔵したい旨の話があることを耳にするが、これも北洋海産貝類が注目されていることと、その中における氏のコレクションが高い評価を得ていることの表れであると付け加えておきたい。

〈標本の紹介〉

現在、当館で収蔵している高川コレクションは、257種1,455点（腹足網915点、掘足網

11点、二枚貝綱529点)となっており、北洋海産貝類をこれだけ収蔵している博物館は、国立科学博物館以外では、あまり例がなく、おそらく体系的に揃っているのは当館が唯一であろう。ホクトボラ、オホーツクイトカケガイなど、標本が入手しにくいものも多数含まれており、まさに北洋海産貝類の集大成と言えるコレクションである。この中から、代表的な標本について何点か紹介したい。なお、命名のいきさつについては、直接、高川氏からの聞き取りによるものである。

○タカガワバイ *Buccinum takagawai* HABE et ITO

腹足綱新腹足目エゾバイ科に属し、昭和47年に波部忠重・伊藤 潔によって新種として発表された。¹⁵⁾ 属名に氏の名前がつけられており、氏の標本を代表するもののひとつである。2点収蔵。

○フクレエゾバイ *Buccinum fukureum* HABE et ITO

腹足綱新腹足目エゾバイ科。高川氏の標本をもとに、波部忠重・伊藤 潔により昭和51年に発表された新種。¹⁶⁾ 2点収蔵。

○イシカワヤゲンバイ *Clinopegma isikawai* (TIBA)

腹足綱新腹足目エゾバイ科。当館の館長であった石川政治の名前が付けられた新種で、当館に氏の標本が寄贈されたからこそ生まれた種名であると言っても過言ではない。2点収蔵。

○ワッカナイタマガイ *Crytonatica Wakkanaiensis* HABE et ITO

腹足綱中腹足目タマガイ科。高川氏の標本により新種となったもので、属名の部分には、氏により分布地域でもある北海道稚内市の名前を取り命名された。

発表は、昭和51年に波部忠重・伊藤 潔による。¹⁷⁾ 5点収蔵。

○ゼンリュウマルタマガイ *Cryptonatica zenryumaruae* HABE et ITO

腹足綱中腹足目タマガイ科。採集者である氏の乗船していた第38善龍丸から属名を付けた新種。昭和51年に波部忠重・伊藤 潔により発表された。¹⁸⁾

2点収蔵。

以上が代表的な標本であるが、この他カワムラワダチバイ、ケハダヤゲンバイ、オナガツムバイなどのエゾバイ科には、稀にしか採集できないものが含まれている。ほんの一部より紹介できないが、これだけでも氏の収集したコレクションが、北洋海産貝類のまとまった数少ない資料となると言えるだろう。自然科学資料を研究する上では、しっかりしたデー

タを持つ現標本を見ることが基本の一つであり、そのことから当館に収蔵されている氏のコレクションはひじょうに参考となるものである。

なお、収蔵されている氏のコレクションについては、昭和60年に発行された「市立函館博物館蔵品目録5 動物篇I」⁽¹⁹⁾に採集地など、詳しく記載されている。

〈お わ り に〉

当館に収蔵されている貝類標本について、前身である開拓使仮博物場時代のモース標本から、最新の高川コレクションについて述べてきたが、これらの標本は、当館にとってもまた、我が国の貝類学研究にもひじょうに重要な要素を多分に持つ資料ばかりである。しかし、明治期からの標本については、いまだ解明できない部分があり、今後さらに調査を進めていく必要があると痛感している。

また、高川コレクションについては、氏の業績に関して記述された文献が以外に少ないことが感じられ、この業績を顕著に表している当館収蔵のコレクションについてぜひとも紹介しておく必要があると考えたものである。まだまだ貝類学については勉強不足で、はなはだ中途半端な内容となってしまったが、とりあえずは収蔵標本の紹介という形でお許しいただきたい。これらの資料が、この紹介によって、多くの方々の研究に役立っていただければ幸いである。

なお、貝類標本以外にも、当館には様々な種類の自然科学資料が収蔵されており、機会を見て、これらについてもぜひとも紹介していきたいと考えている。

最後に、本論をまとめるにあたって、資料提供、ご助言くださった日本貝類学会会員高川金次氏、五十嵐重雄氏、データ作成作業などをしていただいた田島明子氏はじめ当館職員の方々に感謝いたしたい。

(市立函館博物館学芸員)

[注]

- (1) 開拓使簿書関係抄録 開拓使事業報告 函館仮博物場 函館博物館100年のあゆみ 市立函館博物館 1979
- (2) D・G ウェイマン 蜷川親正訳 エドワード・シルベスター・モース 下巻 中央公論美術出版 1976
- (3) 鶴沼わか モースの見た北海道 北海道出版企画センター 1991
- (4) 北海道立文書館蔵 開拓使事業報告 乾 函館支庁 1881
- (5) 市立函館図書館蔵 函館博物場陳列列品目録 1892
- (6) 市立函館博物館蔵 明治11年～大正11年 列品目録 水産陳列場
- (7) 千代 肇 水産陳列場 函館博物館100年のあゆみ 市立函館博物館 1979
- (8) 市立函館図書館蔵 貝類展覧会関係書類のーモース先生蒐集函館付近貝類目録ー 1930に出品・展示した貝類標本が記載されている。
- (9) 鶴沼わか モースの見た北海道 北海道出版企画センター 1991
- (10) 五十嵐繁雄 北限の海産貝類とマダカアワビ 松前離島小島を愛する会会報 第7号 北海道・松前 離島小島を愛する会 1989
- (11) 船水 清 日本貝類学の開拓者 岩川友太郎伝 岩川友太郎伝刊行会 1983
- (12) 西田祐一 市立函館博物館五稜郭分館 函館博物館100年のあゆみ 市立函館博物館 1979
- (13) 高川金次氏の談による。
- (14) 波部忠重・伊藤 潔 サハリン産エゾバイ属の新種タカガワバイ 日本貝類学雑誌 VENUS 第31巻 第2号 日本貝類学会 1972
- (15) 波部忠重・伊藤 潔 サハリン産エゾバイ属の新種タカガワバイ 日本貝類学雑誌 VENUS 第31巻 第2号 日本貝類学会 1972
- (16) Tadashige Habe and Kiyoshi Ito Four New Species From the Seas around Hokkaido Saghalien Reprinted from the BULLETIN OF THE NATIONAL SCIENCE MUSEUM Series A (Zoology) Vol.2, No.2, June 22, 1976
- (17) Tadashige Habe and Kiyoshi Ito Two New Naticoid Species (Mollusca) from Hokkaido Reprinted from the BULLETIN OF THE NATIONAL SCIENCE MUSEUM Series A (Zoology) Vol.2, No.2, June 22, 1976
- (18) Tadashige Habe and Kiyoshi Ito Two New Naticoid Species (Mollusca) from Hokkaido Reprinted from the BULLETIN OF THE NATIONAL SCIENCE MUSEUM Series A (Zoology) Vol.2, No.2, June 22, 1976
- (19) 市立函館博物館蔵品目録5 動物篇 I 動物標本 市立函館博物館 1985

[参考文献]

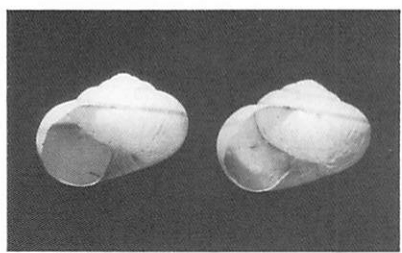
- 波部忠重・伊藤 潔 原色世界貝類図鑑 Vol.1 北太平洋編 保育社 1965
東 正雄 原色日本陸産貝類図鑑 保育社 1982
波部忠重 日本産軟体動物分類学二枚貝綱／掘足綱 北隆館 1977
R. T. アボット・S. P. ダンス 波部忠重・奥谷喬司監修・訳 世界海産貝類大図鑑
平凡社 1985
肥後俊一 日本列島周辺海産貝類総目録 長崎県生物学会 1973
滝 巖 平瀬与一郎氏の45周年忌 貝類学雑誌 第29巻4号 日本貝類学会 1970
北海道大百科事典 下巻 北海道新聞社 1986

北 海 貝 類						
ムレツキス	ラビラリン	パテルフー	シホスリー	アノドント	サワビー	バントラー
マサシイ	アス	ナチカシ	トロカス	マリガリ	ヨルテア	テリナ
コンスタン	エチナラ	シース	ダワライ	エリアン	カルリスラ	シャーマ
リンナ	ドリーム	ナチアラ	リンネター	エリアン	カルリスラ	リニ
ムス	ピケア	アミア	ブライル	ユース	リトプ	ソイレ
	エチナス	バクシ	アタム	ムラー	テップ	ソラウ
	バブ	バクシ	ヘリキ	ノアキ	カー	マカ
	メタリ	ナルゴ	クロ	ペリ	リネ	マカ
	アスター	ナキ	モノ	プロ	ドン	ルトラ
	アミ	ネブ	ゴ	スマ	ラス	ノア
	タチ	サナ	ゴ	プ	デ	グ
	アワ	以上	リ	ハ	ア	リ

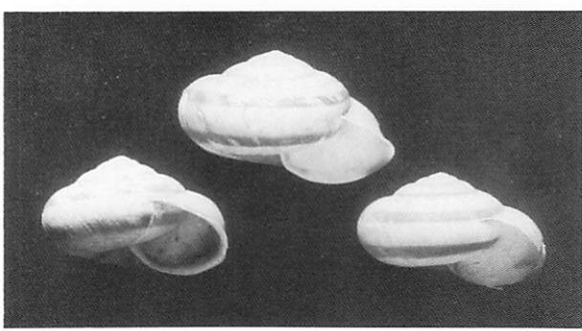


水産陳列場のラベル
上 ミスジマイマイ
下 ヒダリマキマイマイ

※北海道文書館蔵 開拓使事業報告 乾 函館支庁 1881 に記載されている「函館支庁管下函館仮博物館・北海貝類」より判読した、エドワード・S・モース採集の貝類標本一覽である。



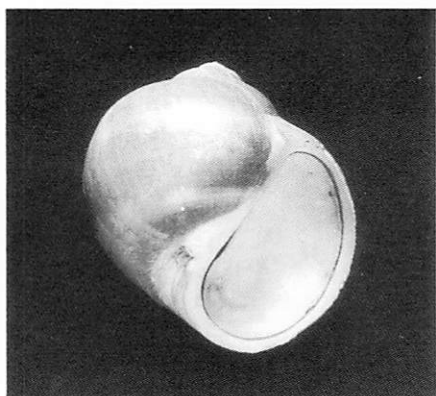
ヒダリマキマイマイ



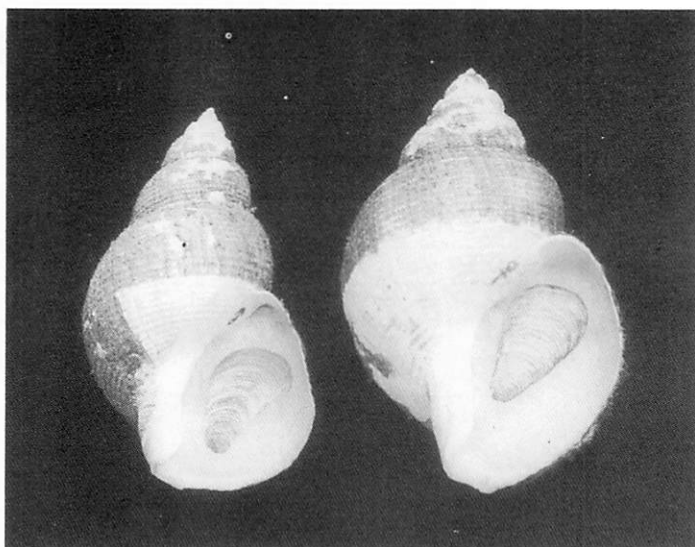
ミスジマイマイ

高川コレクション主要貝類標本一覧

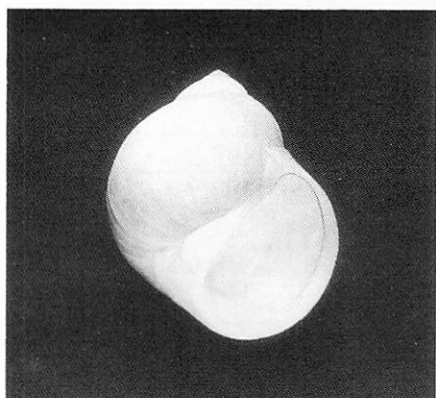
綱	目	科	和名	採集年月日	採集地	
腹	原	ユキノカサガイ科	ユキノカサガイ	1965. 7. 7	北海道上磯郡木古内町釜谷	
		コガサガイ科	スゲガサガイ	1965. 6. 18	旧ソ連邦サハリン西岸久春内沖	
	腹	ミミガイ科	カムチャッカアワビ	1978. 6. 21	カナダ	
	足	スカシガイ科	カワムラスカシガイ	1980.11.10	ムサシ堆 4~50m	
		目	ニシキウズガイ科	オホーツクエビスガイ	1965.12.14	旧ソ連邦サハリン多来加湾落歩沖 95m泥
			フトスジエビスガイ	1971. 8. 23	旧ソ連邦サハリン多来加湾落歩沖 125m	
足	中	ヒゲマキナワボラ科	エゾネヂヌキガイ	1967. 8. 12	旧ソ連邦サハリン亜庭湾	
		目	タマガイ科	ランジタマガイ	1973. 3	北海道宗谷郡猿払村沖オホーツク海 88m泥砂
	ワッカナイタマガイ		1967. 6. 2	北海道稚内市時前沖 50m砂泥		
	ゼンリュウマルタマガイ		1982. 9. 25	稚内市宗谷岬沖 76m砂泥		
目	ホッキョクタマガイ	1968. 9. 10	旧ソ連邦サハリン西岸 60m砂泥			
綱	新	目	エゾバイ科	タテゴトナシボラ	1963. 4. 8	ベーリング海 420m
			ミギマキタテゴトナシボラ	1972. 7. 28	北海道釧路市沖 60m	
			メロンボラ	1974. 3. 24	ベーリング海 120m	
			ベーリングヤゲンバイ	1973.11.21	旧ソ連邦サハリン多来加湾 85m泥	
			カワムラワダチバイ	1971. 6. 18	46°-40'N 143°-58' E 760m	
			イシカワヤゲンバイ	1975. 5. 20	旧ソ連邦サハリン中知床岬沖 700m	
			ヒレエゾボラ	1971. 6. 10	旧ソ連邦サハリン多来加湾落歩沖 135m	
			ホッキョクエゾボラ	1967. 9. 20	旧ソ連邦東カムチャッカ 200m	
	タカガワバイ	1973. 7. 5	旧ソ連邦サハリン北知床沖 209m泥砂			
	足	目	イトカケガイ科	オホーツクイトカケガイ	1974. 6. 10	旧ソ連邦サハリン北知床東岸 210m
ホッキョクイトカケガイ			1981. 9. 13	北海道稚内市宗谷岬東沖24マイル 75m砂泥		
二	目	スウ	オーロラニシキガイ	1969. 4. 20	北海道稚内市大字声間沖 53m砂泥	
	目	イイ	イタヤガイ科	ベーリングニシキガイ	1971. 6. 23	旧ソ連邦サハリン中知床岬沖 220m泥
			アズマニシキガイ	1971. 8. 15	北海道上磯郡上磯町七重浜	
具	目	イマ	ハナシガイ科	オウナガイ	1972. 4. 20	旧ソ連邦サハリン西岸久春内沖 85m
		目	チリハギガイ科	キタノコフジガイ	1972. 5. 28	北海道宗谷郡猿払村エサンベ沖 50m
	目	スタ	トマガイ科	オオマルフミガイ	1969. 7. 10	旧ソ連邦サハリン多来加湾落歩沖
	目	ダ	ザルガイ科	コケライシカゲガイ	1965. 6. 7	旧ソ連邦サハリン西岸久春内沖
	目	レ	ニコウガイ科	ケショウシラトリガイ	1972. 4. 25	旧ソ連邦サハリン西岸久春内沖 85m泥砂
		目	ガ	オトヒメハマグリ科	ワダツミウリガイ	1963. 7. 28
綱	目	イオ	オオノガイ科	エゾオオノガイ	1971. 6. 15	旧ソ連邦サハリン亜庭湾 73m
		目	ノ	キスマトイガイ科	ハナシキスマトイガイ	1961. 9. 10
	アカビチシマガイ			1972. 7. 2	北海道宗谷郡猿払村エサンベ沖 50m	
目	ガ	ハラプトチシマガイ	1974. 6. 25	旧ソ連邦サハリン多来加湾 153m		



ワッカナイタマガイ
45°-36' N 142°-30' E
北海道宗谷岬沖 75m
1981年9月13日

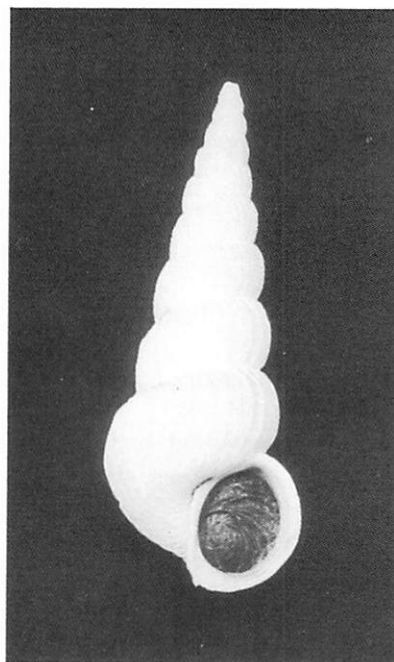


イシカワヤゲンバイ ♂♀
46°-40' N 143°-58' E
旧ソ連邦サハリン中知床岬沖 700m
1975年5月20日

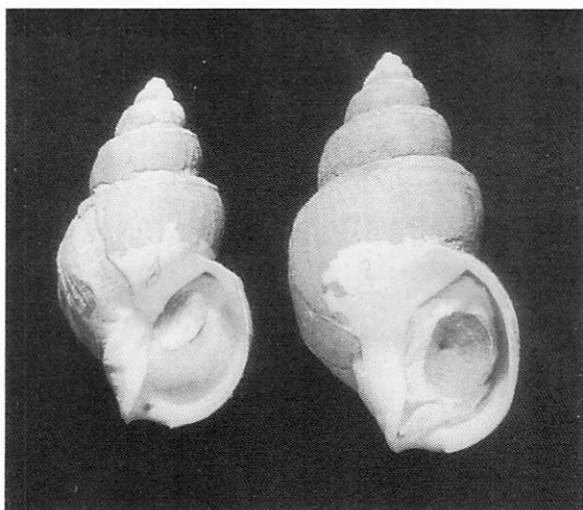


オホーツクイトカケガイ
49°-07' N 144°-58' E
旧ソ連邦サハリン北知床東岸 210m
1974年6月10日

ゼンリュウマルタマガイ
45°-26' N 142°-30' E
北海道宗谷岬沖 76m 砂泥
1982年9月25日



タカガワバイ ♂♀
49°-07' N 144°-58' E
旧ソ連邦サハリン北知床東岸 209m 泥砂
1976年10月2日



装幀

- 吹貫玄関。函館で最初に開かれた博物館の入口である。開拓使函館支庁仮博物館は、明治11年6月に竣工して翌年5月25日に開場し、函館仮博物館と呼ばれた。

和洋折衷木造建築で現存する博物館として最も古く北海道指定有形文化財となっている。

- 体裁は、明治23年6月に引継がれてきた合衆国博物館報告書のなかで最も古い1867年ワシントン発行のデザインである。

市立函館博物館研究紀要 第3号

1993年3月31日発行

編集・発行	市立函館博物館
☎040	北海道函館市青柳町17番1号 TEL 0138-23-5480
印刷所	有限会社 共立印刷
☎040	北海道函館市吉川町6番6号 TEL0138-43-7650

BULLETIN
OF
HAKODATE CITY MUSEUM

No. 3

CONTENTS

Preface

KAZUHIKO OKADA : The Denbigh Famillies in Paintings

—A visionary supreme ruler of the northern sea—

WATARU OZAKI : On Specimens of seashells in the Hakodate city Museum

—Focusing on the Takagawa Collection—

HAKODATE :

1993